

報告書

第7回

子育て支援センター全国セミナー

2016 in 千葉



テーマ

いっぽ 動き出すときは いま
—地域で支え合う子ども子育て支援—



主催 日本子ども子育て支援センター連絡協議会(日本子ども子育てネット)
主管 千葉県保育協議会 千葉県子育て支援担当者会議
後援 厚生労働省 千葉県 浦安市
(社福)全国社会福祉協議会 全国保育協議会
(社福)日本保育協会 (公社)全国私立保育園連盟

日程 平成28年9月8日(木)~9日(金)2日間
会場 明海大学 浦安キャンパス
千葉県浦安市明海1丁目 TEL 047-355-5111(代表)

開催要項

テーマ

「 いっぽ 動き出すときは いま 」

—地域で支え合う子ども子育て支援—

1. 趣 旨

次世代を担う子どもたちは、地域の宝であり、活力の源、未来への希望であります。ただ、子どもの育ちと子育てを取り巻く情勢は厳しさを増しています。国民生活基礎調査では平成24年（2012年）の「子どもの相対的貧困率」（17歳以下）は16.3%となっており、これはOECD加盟国のなかでも高く、今後もやや上昇傾向にあるとも言われています。さらに、社会環境の変化は子ども達の心身の発達や機能の発育不全、気になる子どもの増加など子どもの育ちにも大きな影響をもたらしています。

すべての子育て家庭が、地域はもとより企業を含む社会のすべてに支えられているという実感が持てるようにしませんか。そのために、私たち子育て支援者は次の重要な役割を担っています。①子育て家庭が抱える課題に「共感し」、②蓄積してきた技量を磨き、真に「寄り添い」③産める「安心」・支え合う「安心」・互いに自己発揮できる「安心」を築くことです。

更なる子どもの育ちと子育て支援の「社会に対する貢献」を高めることを目的としてセミナーを開催いたします。

2. 主 催 日本子ども子育て支援センター連絡協議会（日本子ども子育てネットワーク）

3. 主 管 千葉県保育協議会 千葉県子育て支援担当者会議

4. 後 援 厚生労働省 千葉県 浦安市 社福）全国保育協議会
社福）日本保育協会 公社）全国私立保育園連盟

5. 日 程 平成28年9月8日（木）～ 9日（金） 全国セミナー

9月10日（土）サテライトシンポジウム（オプション）

6. 会 場 明海大学浦安キャンパス 体育館 千葉県浦安市明海1丁目

7. 参加者数 425名

8. 参加対象 全国の子育て支援拠点事業実施者、保育園・幼稚園・認定こども園、行政関係者、養成校学校関係者等

9. 参加費 全国セミナー参加費 15,000円（会員14,000円）交流会参加費5,000円

期日 平成28年9月8日（木）～9日（金）

第7回 子育て支援センター全国セミナー
2016 in 千葉

第1日 9月8日(木)

13:00 開会



【メイン会場の様子】



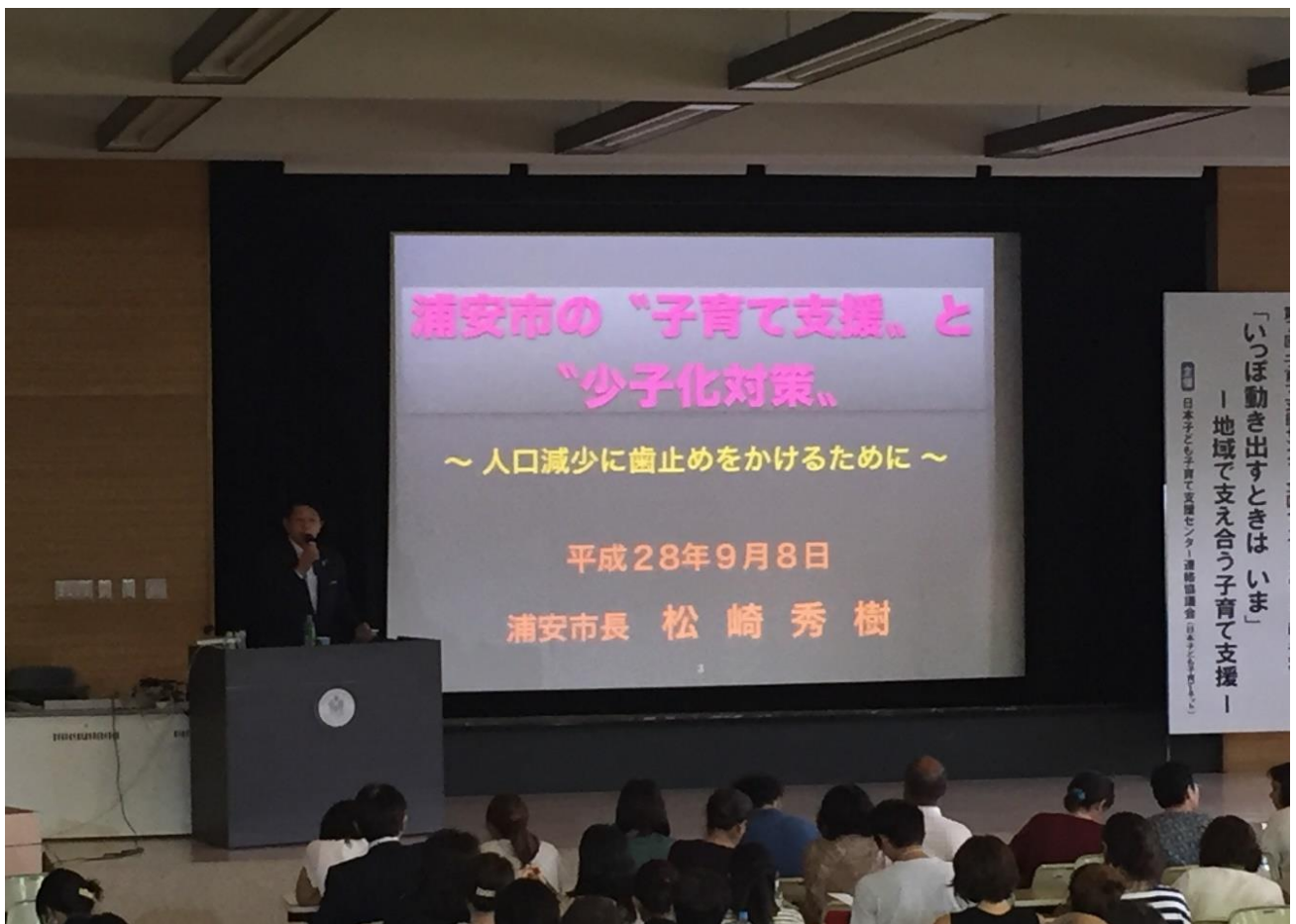
◆行政説明

『地域子育て支援拠点の概要と展望』 講師：厚生労働省少子化対策室長



◆先進事例

『浦安市のネウボラ』 講師：松崎 秀樹氏 (浦安市長)



◆基調提案 1

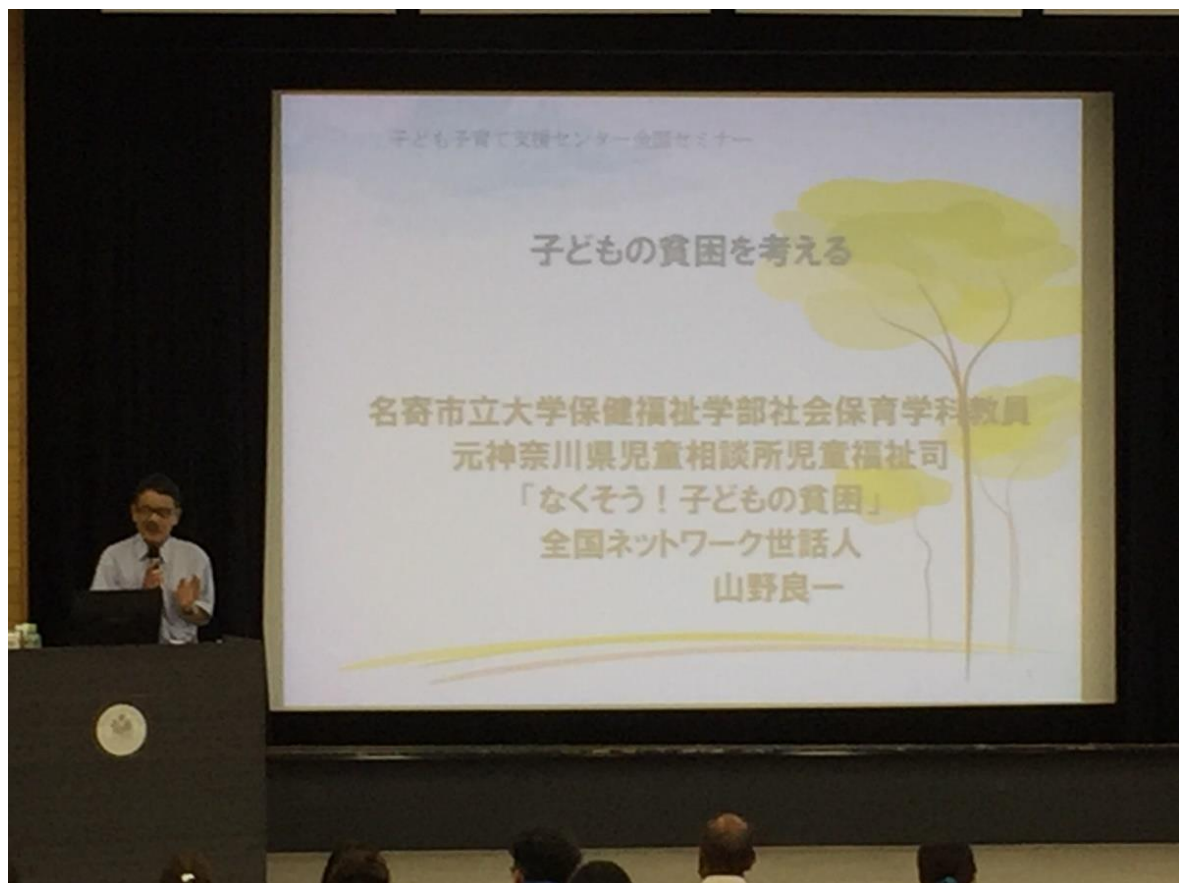
「歯から見える親子関係の危機」 講師：安井 利一氏（明海大学学長）



◆基調講演 2

「子どもの貧困を考える」 講師：山野 良一氏

(名寄市立大学社会保育学科 教授・「なくそう！子どもの貧困」全国ネットワーク世話人)



◆シンポジウム

『子どもの貧困・虐待と向き合う保育と子育て支援』

コーディネーター：山野 良一氏
 (名寄市立大学社会保育学科 教授)



パネラー：

①塚本 秀一氏 (左)
 (湘南学園 (滋賀県)
 保育の家しょうなん 園長)

②遠藤 俊彦氏 (右)
 (東京大学大学院教育学部教授)



◆交流会 「響き合うあなたの輝き」

【開催場所】 明海大学「30周年記念館 スチューデントホール」



【千葉県保育協議会

会長 久保 美和子氏 ご挨拶】



【浦安市長 松崎 秀樹氏 ご挨拶】



【明海大学学長 安井 利一氏 乾杯！！】

【司会】



【アトラクション①】 浦安太鼓連



【アトラクション②】 明海大学ジャズオーケストラ



【アトラクション③】 いちかわチャレンジド・ミュージカル



【交流会 「響き合うあなたの輝き」 会場の様子】

【各地の名酒が勢揃い！！】



【交流会 「響き合うあなたの輝き」 会場の様子】



【閉会の挨拶】



【来年の開催地「山口県」の実行委員会】



◆8:30～9:45 分科会A 講演 (下記の5つの講演から1つ選択)

- No. A-1 「子育ての現実から子育て支援を考える」・・・12
 汐見稔幸氏・(白梅学園大学学長)
- No. A-2 「子どもたちのシグナルから子育ての現状を考える」・・・14
 広木克行氏(神戸大学名誉教授)
- No. A-3 「人の心の誕生と進化の道すじをたどる」・・・16
 明和政子氏(京都大学大学院教育学研究科教授)
- No. A-4 「生活時間からみえる親子生活の貧困化」・・・18
 品田知美氏(城西国際大学福祉総合学部准教授)
- No. A-5 「乳幼児の大規模調査から見えてきた子どもたちの異変の原因」・・・20
 松添直隆(熊本県立大学) 他

◆10:00～11:15 分科会B 講演 (下記の5つの講演から1つ選択)

- No. B-6 「子育ての現実から子育て支援を考える」・・・22
 汐見稔幸氏(白梅学園大学学長)
- No. B-7 「親達の子育て不安と子育て支援の課題」・・・24
 広木克行氏(神戸大学名誉教授)
- No. B-8 「ヒトの心の誕生と進化の道すじをたどる」・・・25
 明和政子氏(京都大学大学院教育学研究科教授)
- No. B-9 「子どもと親の生活バランスを共に探す支援」・・・27
 品田知美氏(城西国際大学福祉総合学部准教授)
- No. B-10 「乳幼児の大規模調査から見えてきた子ども達の姿」・・・29
 松添直隆氏(熊本県立大学) 他

◆11:30～13:00 ランチ・交流の場・ランチョンセミナー

- ①「通信クリニック 効果的な広報メール・便りの作り方」市川玲子氏・・・31
- ②「保育・子育て現場におけるITの状況と事例の紹介」倉持孝士氏(株式会社ビズウインド)・・・33
- ③『子どもの身体を育てる歩育の理論と実践』三原 留美氏(熊本県 山東こども園主任)・・・34
- ④新しくわかったアレルギーのしくみ茂呂 和世氏(国立研究開発法人 理化学研究所)・・・35
- ⑤「午睡をしない保育」 中川浩一氏(山口県子育て支援センター連絡会)・・・37
- ⑥千葉柏市の実践：社会教育力創造—保育所併設子育て支援を探る【講演中止】

◆13:00～15:00 分科会（講演とワークショップ）（下記5つのワークショップから1つ選択）

- No. C-11 《ワークショップ》子育て家庭を支える：地域力一つなげる—お互いよろこび・・・・・・・・・・ 39
鈴木栄治氏（千葉大学）他
- No. C-12 《ワークショップ》虐待・貧困の連鎖を断ち切るには・・・・・・・・・・ 41
鈴木真廣（富津市 子ども子育て会議副会長/千葉和光保育園園長）他
- No. C-13 《ワークショップ》支援センターで始める妊娠期からの家族支援の価値を探る・・・・・・・・・・ 43
川部利香氏 助産師（船橋中央病院看護学校専任講師）
- No. C-14 《ワークショップ》葛藤する支援者対策：ストレスを抱えない支援者の心得と援助技術・・・・・・・・・・ 45
木村弘美氏（社会福祉法人愛の泉 ホームスタート・かぞ）
- No. C-15 《講義とワークショップ》「子どもの夜更かしの危険性とそれを防ぐ手立てとは」・・・・・・・・・・ 47
福田 一彦氏（江戸川大学社会学部教授・江戸川大学睡眠研究所長）
- No. C-16 「乳幼児とスマホ・ゲーム・テレビ～なにがよくない？こうしてみよう！」・・・・・・・・・・ 49
古野 陽一氏（NPO法人子どもとメディア専務理事）
- No. C-17 「子どものありのままが育つ場と大人のあり方」・・・・・・・・・・ 51
野村直子氏（森のようちえん運営委員）

◆15:15～16:45 市民一般公開 講演会

- 「赤ちゃんと響きあう 親が親になるということ」お子さんとの絆が生まれる不思議さ・・・・・・・・・・ 54
講師：橋本洋子氏（山王教育研究所 臨床心理士）

◆17:00～17:30 閉会式：大会宣言 次回開催県挨拶 閉会宣言

◆8:30～ 9:45 分科会 A 講演

No. A-1 「子育ての現実から子育て支援を考える」

汐見稔幸氏・(白梅学園大学長)

【内容】

○子育て支援とは？

- ・子育て支援という言葉は受けている方は使わない。
- ・人類は歴史の中で昔に戻る。(子育ては、もともとこうだったよね)
- ・「孤育て」=子育てが孤独でつらい。下手になってさぼってきているのではない。
祝福されない子育て環境がある。



○子育ての人類史をモデルに (これまでの日本人はどのように子育てをしていたのか)

参考) 柳田 国男

- ・群れによる子育て (群れにいる事で社会生活の訓練をし、親が教えなくても身につけていた)
- ・笑いによる子育て (頭ごなしに叱る事はしなかった。笑いに変えたあと最後に大切な事をそっと伝える)
- ・ことわざによる子育て (人生を教えるために使った)

○日本は世界の中でも男女の平等が比較的に行われていた。

例) 太田素子「江戸の親子」父親が育児をしていた時代→育児は母親がするものではなかった。

イザベラバード「日本奥地紀行」オールコック「大君の都」エドワードモース「日本その日その日」

<昔の子育て>

①育児を産んだ母親だけでおこなった事はない。父の大切さ、存在の大きさ、群れの子育ては母親も。

②子育ては、子育てとセット。子どもたちは、地域という場・環境の中で自主的に育っていた。

それがあつての子育て。

③子どもは、家族の行う労働、仕事に参加してそこで、あれこれ身につけた。これが子育ての実質的中身。

④生活の中で育てた。という事。今、その生活が大きく変わって苦労している。

※与えられた命をどう輝かせるか=人生。一人ではできない。全員で行っていくもの=子育て

<子育て支援とは>

①母親だけの育児から開放。地域ぐるみでの育児環境の創造。子育て環境をも創造。地域力の創造。

②社会全体で出来る環境の創造。個人責任だけにしない環境づくり。

③エンパワー=親の持っている潜在力を発揮できるように援助する。上から指導はしない。

④特に子どもとの関わり方の支援

⑤母親の自己実現支援。

○子育て支援をしていくにあたって配慮、考え方

1. ニーズの把握とニーズへの応答 (本当に必要としていることとは?)

①マイナスの精神状態の人をマイナスにしない。

無理にプラスにもっていくのはだめ。プラスの場所からマイナスを引き上げようとするのではなく、自分たちが同じ目線までいき、背中を押す。

②ニーズは、本当に必要な事。それに応じていく。

「ねばならない」ではなく、その人にとって必要な事は何か検討し、実践する。

→普段のコミュニケーションを大事に。支援を必要とする人はなかなか、踏み出せずにいる。

2. 自立の意味を間違えない。(脳性マヒの東大教授 熊谷さんの話)

・障害とは、少数者と社会の間にあるズレ。

・依存しない事が自立なのではない。依存するところが少ないと生きづらい。一人ひとり弱さがありその

弱さをシェアしてつながっていく事が大事。

【講演をとおして明確になったことや課題（制度・人・地域・事業内容など）】

○現代の貧困問題をしっかり念頭に

- ・貧困と貧乏は異なる。→お金がなくても周りの手を借りながら生活はできた。
- ・経済的貧困がどういう生活を現代で生み出すか。
- ・親の自尊心の貧困・人間関係の貧困・夢の貧困・ストレス発散環境の貧困

○群れる事の大切さ

- ・子どもが育つための場所、環境なくして育たない、母の大変さの理解

○親の決定を励ます

- ・対人支援の基本原則（自己決定の励まし）励ますことで成長（私が決めたという自信）

○子どもをよく見る練習を

- ・子どもは見方次第で違って見える。善く見てあげると「善く」なる。向善説、加点法
- ・日本の母親は「善く見る」事が苦手。 例) 何をやるにも遅い子→丁寧な子

○KKKH方式

- ・まず「聞く」次に「共感する」そして説得するのではなく一緒に「考える」 別の言い方をしてみると
 - ①相手のいう事を中断しないでじっくり聞く。
 - ②相手の言い分をまとめてみて確認する。「こういう事？そうなのね」
 - ③それで一度共感する。「そうね、そう思ったら頭にくるわね」
 - ④その上でどうすべきか相談する。考えてもらう。

○子ども食堂

- ・孤立する実態をつかむ。語り合う。たまり場をいつでもどこでも。ホームスタート的個別取り組み

【子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等】

○子育て支援の手法、思想

- ・支援を必要としている人の多くはデリケート→細やかさと、丁寧さを。
- ・初めて来た人と既に来ている人をつないであげる心配り。
- ・親もいろいろと抱えている人もいる。（発達障害など）
- ・私の事を見て欲しい。というニーズ
- ・個別性の原則。自己確認（あなたは頑張っている）

◆8:30～ 9:45 分科会 A 講演

No. A-2 「子どもたちのシグナルから子育ての現状を考える」

広木克行氏（神戸大学名誉教授）



【内容】

相談活動を通して、表向きではない裏側のシグナルを読み取ることが大事と知った。相談者は、不登校の学生、ひきこもりの人と共に生活しながら生きている人の相談、障がいの相談も多いが、診断は医者ではないのでしてはいけない。子どもからは、

エネルギーをもらったり、うばわれたりもする。子どもたちが出しているシグナルに気づくことが重要。

4月の熊本地震の後の新聞社説より、子どもの心労は大きく心のケアが大切で、怖いを思いをした子どもは、親から離れない、赤ちゃん返りをする。この行為は、決しておかしいことではない。幼児は人間の文化に触れていないといけない、まだまだ文化を学んでいる時である。自然と関わって生きている方が多い幼児に、我々大人は地球の大自然を守り、自然の中で生きられるようにする義務がある。

子どものシグナルを親、親族、保育者、友だちが活かされる方向に持っていけると良い。シグナルの意味を考えることが大事で、価値判断は最後でよい。親と子の関係、兄弟との関係、シグナルは正常だから出るのである。異常と判断してはいけない。正そうとしたり、直そうとしてはいけない。幼い子どもの言動には、すべて意味があり、意味を考えない大人は子どもをみていない。学校へ行きたくても行けないのは、その子の気持ちに大きなストレス、問題があるからである。不登校は悪い子と判断されがちだが、その子の人間関係を見る必要がある。

○「幼保小の連携」

小学校からは、入学するまでに出来るようにして欲しいと言われるが、保育所は小学校の下請けとは違う。小学校は教え学ぶところ、保育所は遊びが中心で、保育士と一緒に様々な体験を通して育つ。そのためには、環境を整え、子どもの言動をシグナルととらえ保育していくことが大切である。小学校との連携は、保育の専門性を考えたうえで、連携を持つ必要がある。

○「子どもをどう見るか」

落ち着きの無い子を困った子と捉えるうちは、子どものシグナルが見えてこない。「困った子」ではなく、「困ってる子」として捉え直せるかが大切である。子どもの方に目を移して、その子の訴えたい事を捉える事が出来ると、子どもの大きな見方の転換、視点の転換となる。

○「シグナルは3つに分けられる」

①行動化現象

暴言、暴力、多動、すぐキレる行動には、意味があると考え。分からなかったら、相談をする事、一人で悩んでいても何の解決にもならない。自分の保育を否定していき、しまいには自分自身がうつ状態になってしまう。

環境の違いからパニックを起こすとすぐに発達障害と考えて、保育士が診断名を使って分かったつもりになる。診断を出すのは医師で、時間を掛けて見極め、診断が付いたら時間を掛けて、専門的に進めていかねばならない。親が直接相談に来るケースは、大丈夫である。保育士が相談に来たケースもある。保育士は、その子の心、様々な人間関係を知って、まるごと理解をするのがプロであり、育ちのサポートの提供をする。

また、「子どもの脳は肌である」の言葉通り、言葉を肌で感じて、脳で考える。スキンシップは言葉以上に感じる事が出来る。小学生の例で、座って居られない、落ち着きがない、母親に発達障害ではないか、ADHDかもしれないと母に告げる。でももしかしたら「接触飢餓」ではと思い、母親に聞き取りをすると、添い寝をしたことがない、良い子にするため叱ったり叩いたりしていたと聞き、教師が話しかける際に肩に手を触れるなどのスキンシップを始めた。母親も添い寝を始めると、1年後には問題行動が消えていた。暴言、暴力、キレるの行動の裏側を読み取ることが大切である。

②体に現れるシグナル

「老子も」の問題が起きている。子どもの運動能力が低下していて、老人化している。外で遊ぶ子が少なくなっていることが原因である。ある中学校では、跳び箱を普通に飛んで、両手を骨折したことから、林先生は「老子も」を見出した。スポーツは大人の文化、一つに特化して秀でたのが大人のスポーツで、子どもは自然の中での遊びで、体感筋力を高める。昔の子どものように、外で自然と共存して遊ぶのが良い。近頃の公園は、制限が多すぎる。野球やサッカーの出来ない公園などがある。体を使っていないため、夜も早く寝ない子が多い。また、筆圧が無い子も多く、HBを使えず2Bなどの柔らかい芯の鉛筆を使っていたりする。そのような子は、脳の抑制力が利かない子とも言われている。

③自傷行為

ダメ出しの育児をしていると、自傷行為を起こす。自分で床に頭を打ち付けたりする。子どものシグナルに気づき、寄り添うことが大切である。

【講演をとおして明確になったことや課題（制度・人・地域・事業内容など）】

①子どもたちの行動の裏側の部分に目を向けることの大切さ

つつい今起こしている行動だけを見て、何で話が聞けないのか、落ち着きがないのかと判断してしまっていた。子どものシグナルに気づける保育、相談できる機関との連携も重要と感じた。

②幼保小との連携の取り方について

幼保小の会議では、今までいかに交流を深められるか、小学校に入学するまでの保育所側の準備は何をすべきかと話し合ってきた。お互いに小学校と保育所の違いを知り合う必要があると感じた。どちらかという、保育所側が受身の状態になっているので、もっと保育所の子どもの現状を伝えて行きたいと思った。

③地域ぐるみの子育ての大切さ

今は核家族になってしまって、親は子育ての文化を継承する機会を持てずにいる。保育士はプロであり、子育て経験の保育士は子育ての先輩でもあるので、もっと保護者支援を行って行きたい。地域の方々にもっと保育所を知ってもらい、園庭開放や園見学を通して、相談の出来る場を広げて行きたいと感じた。

【子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等】

子育て支援はどうあるべきかと考えたとき、保護者や地域の親たちが子育てや家庭問題の不安や悩みを相談できる人になりたい、そのためには、研修や学べる場が重要と考える。相談できる場を作るとともに、そのような場があることを広めることの大切さを痛感する。今、身近なところで出来ることから子育て支援を行っていて、園庭開放の充実を図るために色々な取り組みを行っている。ポスターを様々な機関に貼らせてもらったり、園だよりを公民館などに置かせてもらって周知を図っている。

子育て支援は「親になった人が子育てを通して人間的に成長をするのを支援すること」と考える。難しく考えず、自分が出来ることから一人ひとりが実践したら、大きな支援につながると思うので、身近なことから始めて行きたいと思う。

◆8:30～ 9:45 分科会 A 講演

No. A-3 「人の心の誕生と進化の道すじをたどる」
明和政子氏（京都大学大学院教育学研究科教授）



【内容】

○科学の視点から人間とは何かを研究

- ・人とは？人は特有の心の働きをチンパンジーとの比較をしながら生物として人が持つ独自の心理的機能を研究。ホモサピエンスの誕生 20 万年前の中で最近 100 年にどのように発達してきたか？→心理的機能の系統発生と生物学的基盤
- ・心の発達の起源(胎児期)→どのようにかくりつされるのか。心的機能の個体発生・発達プロセス
→「人の心の成り立ち」を科学的に明らかにしていく(比較認知発達科学)
心理学は、現在、分離融合領域で捉えている。(心理学・認知科学・医学・情報学・教育学等)

○文科省は生まれつきといているが、生まれつきだとは思っていない。

- Jene × environment × age ①、胎児期からの心の連続性 ②環境としての親の発達
③双方向的営み どの時期にどの環境が必要か、理解した上で発達に関わることが大切。
(この理顔が poor な場合は虐待などを受け、思春期に問題がでてくる)

○生まれつき母子はないと思っている

- ・胎児期後期に脳の面積が増大し脳の溝が増加する。→この時期が大切で、この前に生まれると発達障害のリスクが起こる。不和な環境によって神経をつなぐネットワークが壊れる

○思春期は始まってから 30 歳まで続く。→前頭葉の構造の機能の成熟が続く。感情の成長は早い(12～14 才)。感情を抑える働き(前頭葉)は 30 歳くらいまで。とギャップが広がっている。18 才～30 歳の間、どういう教育が考えられるかの見直しも必要。(ex 選挙権)

○人とチンパンジーとの比較

- ・チンパンジーの親から子へ知識がどう伝わるか→子は親の姿を見て確保するが模倣は苦手
*模倣とは・・・人の知性と文化を成功させた極めて重要な能力。遺伝子では伝わらない情報を他者から効率よく学べる。知識や技術を次世代に忠実に伝える。蓄積できる。心理状態を自動的にシュミレーションできる。
 - ・人もチンパンジーも生まれてすぐ新生児模倣。生後 2 か月で消える。・チンパンジーは「身体模倣」が苦手。相手を見ているときの目の付け所が違う→自閉症の人とも似ている(目的志向的行為)
- < 1 才児の実験 > 親の顔と物を見せる。人は模倣を抑制しと物の間を無駄な視線で動かす。チンパンジーは物だけを見る。自閉症の子は物と少し顔も見ると。
- 「心の革命」=模倣を抑制し他者の行為を理解す。2 才前から人は必ずしも他者の行為をそのまま模倣しなくなる。経験により行為の理解の仕方を変える。他者は自己とは異なる心を持つ存在であることを知る。
- ・相手の心を理解する脳のシステム→ミラーニューロンのシステム(MNS)
自分の運動実行に関わる脳部位が他者の行為・認識にも関わっている

【講演をとおして明確になったことや課題(制度・人・地域・事業内容など)】

●メンタライジング→自己と他者を切り離して考える機能。

表面には現れない心の状態をイメージ・推論ある機能。この機能が養育者も弱ってきているのではないか？

この機能がないと適切な養育ができない。

⇒親の支援は何か？ どういった環境が私たちホモサピエンスに必要なか？

●押さえ怪な環境なしには人らしい心は育めない。

真似する。相手の心を想像する。教え合い、助け合う。

(考えてほしいこと)

- ①学習と発達の差異は？
- ②人特有の心的機能の特徴は？
- ③就学前までの人の子どもの心的機能の発達を支援する社会実像の可能性

【子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等】

(参加者からの質問と回答)

- ◎メンタライジングシステムが円滑に発達できる保育での環境は？
 - ・前頭葉をしっかり働かせる機能を作ること。
 - ・親がまだ成長している時期ということを理解することが必要。
何故、親が今苦しいのかわかれば楽になる。
- 第3者からの問いかけ、想像性の選択肢を具体的、多様に提案、提供しイマジネーを働かせる

◎ 母: 鬱、妊娠中

第1子、指差しせず、発達障害 ADLD,小学3年 子どもと親の支援をどうしていくか？
上の子が見ている世界が他の子が見ている世界と違うことを親に理解してもらおう。違うことは悪いことではない。→確認できるメンタライジングシステムができているのかどうかを考えていく環境がとても大切

◆8:30～ 9:45 分科会 A 講演

No. A-4 「生活時間からみえる親子生活の貧困化」

品田知美氏 (城西国際大学福祉総合学部准教授)



【内容】

収入だけではない貧困化の側面

Time Poverty ・労働に使われる時間が長くゆとりがない

欧米/時間貧困・収入高 ⇔ 日本/時間貧困・収入低

欧米の場合は、収入が低い家庭は労働時間が短い働いていない
＝時間はゆとりがある。

日本の場合は長時間働いても収入が低い working poor (時間的にも経済的にも貧困) の割合が高い
親子の時間がますます貧困化

Time Rich は公務員・大企業・教員。収入高。平日は父不在。休日揃いやすい

Time Poverty 父は運輸・サービス・通信等不規則なため、母の仕事は限定される。休日不規則。

Time Poverty 父母共に高学歴、正規雇用。育児は祖父母の支え・朝夕延長保育。

平日はそろって食事が出来る。休日は揃う。平日は稀。

■親子生活が変化している社会的背景

自営世帯が多く仕事の傍らで子育てができた。専業主婦が子育てに専念していた。

保育園は低所得者のための福祉施設として作られた→税金を投入→高所得者層が。

子育てに期待される水準が上がった。(80年代) 使いやすくなる。

- ・添い寝の推奨・・・母親の睡眠不足
- ・母乳の推奨・・・母乳期間が長くなり、心身の負担。自分のケアができない。
- ・抱っこの推奨 (抱き癖はつかない)・・・長時間の抱っこで腱鞘炎
- ・断乳から卒乳へ・・・子どもの意志が母親の意志より優先

母親の育児時間はずっと右肩上がり。子ども中心の考えであり、自分を犠牲にして子育て。

夜泣き・・・「よくあること」と言われ親は辛い。

バランスがくずれてしまう。親目線で考えてみると育児の悩みも少しは楽になるのではないか

○「溺愛」と「放任」育児の共存

- ・溺愛→子どもの全てが気になる。手をかけすぎる育児が苦にならない。子どもの育ちが重い通りにならない。



子どもの成長に満足できない。

- ・手をかけすぎる育児につかれてくる → 放任

○食の関係が見える家族 どちらもバランスの回復を促す声かけが必要

- ・日本の炊事にかかる時間は長い→子どもと過ごす時間は少なくなっている。
- ・食について悩んでいる親は多い。
- ・食卓を家族全員で囲む機会は減っている (特に無職・パートの母に多い)
- ・極端に子どもと食べる時間が少ない→子ども食堂の広がり

○普段誰が保育しているか

- ・母の割合が9割 父ついで祖母が5割・・・祖母の割合が多いのは日本の特徴

■子育て支援が特に必要とされる親子とは

現代の日本・・・自分を肯定できない子どもがそのまま親になる。自分を肯定する力がない。

親の育った階層が子育ての常識に影響する。

低学歴・・・子どもには色々させたい→小さい頃に熱心に教える→何をさせたらいいかわからない

高学歴・・・小さい頃はのびのびと→高学年頃から熱心になる

親も育てる必要がある。教えてあげよう、という態度では逆効果。信頼関係が生まれない。

虐待がおきやすくなるリスク要因＝妊娠・出産での、現実と気持ちのギャップ。親の身体的心理的問題
親の生活を守る・・・家族の支えが弱い。家族の関係性が乏しい。

子どもを預ける時間お確保することが大切。

■みえない家族に支援の輪を広げる

父母のどちらか又は両親共に外国人である子どもの割合・・・6.9%

1位 (父) 日本 (母) フィリピン (タガログ語) ⇒語学に難

2位 (父) 韓国 (母) 韓国

3位 (父) ブラジル (母) ブラジル (ポルトガル語) ⇒語学に難

フィリピン・韓国・・・ひとり親率10%を上回る。

ひとり親の貧困率は高い。更に外国である日本で暮らすことは二重苦となってしまう。

子育て支援の場に繋ぐアウトリサーチの工夫 (支援を受けられることを知らない親が多い。)

日本語力をつけるサポート。情報の翻訳。日本人が外国語・文化を学ぶ。

外国の子ども・・・荷物になっていないか。利用してもらおう工夫

【講演をとおして明確になったことや課題 (制度・人・地域・事業内容など)】

時間にゆとりのある家族・ない家族、また子育てに熱心になりすぎて反対に子どもを苦しめてしまう親と全く子育てに振り向かない放任の親。そして2000年以降、子育て中の親たちは仕事をしている・していないに関わらず育児時間が増えている中、手厚く育てられているとそうでない子 というように子育ての現場での差異が大きくなっている。子育ての差異化に子育て支援もそれに合わせて個別化が求められている。その人・生活に合わせた支援を考えていかなければならない。外国のルーツを持つ親子への支援も工夫しながら対応していかなければならない。

【子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等】

■身近な支援者であるために

あらゆる支援の入口は相談・・・何気ない日常会話から発展する。

「こうあるべき」という価値観を持たず自由でいる・・・相談したことで嫌な気持ちにさせない。

他の人と交流を促すためのしかけを考える。

DVとの関連性に注意していく。

色々な目配りをしながら推していく。

—参加者の話に対しての先生のアドバイスから—

イギリスの保育の考え

Q1 日本の見学者の質問「モンスターペアレントはいるか？」

⇒答え「その言葉を口にした瞬間に親と協力できなくなる。どんな親でもまず全てを受け入れることが大切」

“モンスターペアレント” という考え方がない。面倒と思うと相手も思う。

Q2 父親・・・うつ、母親は長時間労働だったが、離婚し、子どもは父親とその両親と暮らす。父親の両親 (祖母) もあまり子どもの面倒を見ず、長時間保育に頼り切り。どこまで支援したらよいか

⇒答え (先生から)

うつの支援はきりが無い。話はあまり聴き過ぎず、淡々と、普通に対応することが大事。受けとめすぎないようにする。

◆8:30～ 9:45 分科会 A 講演

No. A-5 「乳幼児の大規模調査から見えてきた子どもたちの異変の原因」

研究報告：大和晴行氏（武庫川女子大学准教授）

松添直隆（熊本県立大学） 村上史子（日本大学歯学部）

コーディネーター：田中浩二氏（東京成徳短期大学教授）



【内容】

はじめに

コーディネーター 田中浩二（東京成徳大学）

何となく気になる子どもたちの姿（排泄を含めた生活習慣、歯並びや咀嚼、運動能力の低下や体幹の弱体化）を、感覚的ではなく調査結果や科学的な根拠を基に考え、今後の対策に活かして欲しい。

■パネラー 1 松添直隆（熊本県立大学）

『3～6歳児の食と生活リズムに関する3年間の調査』

目的①

テレビ視聴時間が長い幼児ほど、就寝時刻が遅く、短睡眠時間で、かつ就寝・起床のリズムが不規則であり、『生活リズムが安定しない』との報告があるが、就寝時刻と食生活にも因果関係があるのではと考え、就床時刻と食生活（食環境、食事内容）について目的とした。

目的②

野菜の摂取は、健康状態と深く関わり、病気の発症リスク低下や死亡率の低下とも関連するとの報告があり、幼児期にとっても重要なポイントである。そこで、幼児の野菜の摂取状況に焦点を当て、食・生活及び体力との関連も目的とした。

目的③

幼児の便秘は慢性化することで将来の生活や健康状況に悪影響を与える可能性がある。そこで、毎日排便する子ども達に着目し、排便状況と食・生活習慣との関連も目的とした。

結果・まとめ

幼児の料理摂取頻度は、生活スタイル要因（就床時刻、朝食時刻、保護者の朝食摂取頻度 etc）、食事の楽しさ要因（食事の中の楽しい会話、食欲 etc）、身体活動要因（外遊び時間、メディア接触時間）との関連性が示唆される結果となった。さらに、料理の摂取頻度と健康状態（排便回数、体力テスト結果）との関連性も確認された。また、料理の摂取頻度の中でも特に『野菜摂取頻度』は健康状態（排便回数、体力テスト結果）との直接的あるいは間接的な関連性が示唆された。野菜は食物繊維が豊富な事から咀嚼との関わりが大きく、口腔機能への影響も大きいことが予想される。また、保護者に対して生活リズムと排便に関して伝える際に、野菜摂取と『腸育』の重要性を伝えて頂きたい。

■パネラー 2 大和晴行（武庫川女子大学）

『幼児の姿勢・体力・運動能力・手先の器用さに関する現状と課題』

○幼児の姿勢

幼児の側面の姿勢画像から5つの視点を設定し、それぞれの割合を算出したところ3歳児時点で、背骨の彎曲が強い『後弯前弯型』が半数を占めるが、5歳頃には良い姿勢とされる『標準型』が全体の6割を占めていた。一方、5歳児の3割が3歳頃から姿勢の育ちがやや停滞している可能性が示唆された。このような停滞した状態の子どもは座位を保持することが難しいのではないかと推測される。その要因として、体幹筋力の低下が考えられ、背骨の彎曲が強い子どもは、腿裏の筋肉や首後ろの筋肉が弱い傾向がある。また、年中、年長

期において下肢の発達を促すためには、腕や体幹といった上半身の動きの活動量を低年齢の時点で増やすことが重要（ハイハイは理想的な運動）であり、姿勢教育を行う際には、年齢によって保育者が身体のどの部分を重視するかを変えていく必要がある。

○体力・運動能力

体力・運動能力の測定を行った結果、3歳時点での差が最も大きく、年齢があがるごとにその差は縮まるものの、3歳時点で高かったグループはそのまま推移し、低かったグループは、そのまま低い水準のまま推移している状況が確認された。3歳児時点での差が『個人差』であるのか『環境や乳児保育の差』であるのかは確認が必要である。また3歳児時点で体力の高かったグループが、年齢があがるごとに若干の体力低下の傾向が見受けられたことが集団生活の増加によるものなのかも確認が必要である。

○手先の器用さ

箸や鉛筆、ハサミといった物の操作を行う上で重要なハンドスキル（以降HS）の調査を行うことで以下の3つの問題が明らかになった。

- ① 5歳時点で親指を使用しない、つまり『拇指対向』能力の獲得に問題が生じている幼児が2割いる。
- ② 3歳児頃までに手指の各指をしっかりと独立させて動かすHSの低下
- ③ 4歳以降は、各指の独立性に加え、指関節のコントロールを行いながら物を操作するHSの低下に加え、撓側の3指（親指、人差し指、中指）と尺側の2指（薬指、小指）の機能分離が十分進んでおらず5指全ての指を使用する傾向が見られた。本来、3指で使用する箸や鉛筆、ハサミなどを5指で使用することでぎこちなさが生じていると考えられる。

■パネラー3 村上史子（日本大学歯学部）

『現代の子どもの顎の成長について』

口腔構造については、構音や咀嚼、偏食、歯等の課題が多くあり、研究が進んでいる。

構音に関しては、約50%の3歳児に問題があったが、5歳児では約10%まで減少するという傾向が見られるということは、やはり口腔の成長が構音に影響を与えているのではないだろうか。

また、口腔は、全身運動機能や知能の発達に寄与することが明らかになっており、幼児の身体能力の低下と口腔構造の変化が関係しているのではないかと考えている。今回は、幼児の『顎』が小さくなっている点について明らかにしていきたい。

調査は、1960年に行なわれた5歳児の口腔構造の計測値と2013、2015年に実施した計測値を比較し、後者の5歳児の方が有意に小さくなっているとの結果が導きだされた。

今後は、運動をする際、顎を使い噛みしめることで運動刺激が生じるが口腔の問題で十分な刺激が得られないのではないかと？顎が小さくなり咀嚼に問題を抱えることで体重増加に繋がるのではないかと？等の検証を進めていきたい。

コーディネーターより最後に

本日各パネラーから提供された情報が、保護者に『正しく、楽しい子育て』を発信するための材料となれば幸いである。

◆10:00～11:15 分科会B 講演

No. B-6 「子育ての現実から子育て支援を考える」

汐見稔幸氏（白梅学園大学学長）



【内容】

○子育て支援の原点

子育て支援をどう定義しますか。

エンゼルプランでは、定義していない。きちんとしていないので、しっかりとした信念を持っていないとブレてしまう。

改めて考えるために、子育てとは何であり、どう行われてきたのか、振り返っておきましょう。

N スペ、はじめて子育てのことが取り上げられる。

- ・ママたちが非常事態
- ・最近科学で迫る。ニッポンの子育て～（全3回）
 - そこでわかったこと
 - ・ママともをつくるのか？
 - ・どうしてストレスが消えないのか。
 - ・イクメン父親を考えるのか。

* 育児がつらいのは、あなただけではない。

人間本来の子育て→昔から行われているのに現在の母親はなぜできないのか。

子育ての人類史をモデルにすると賢明。

これまで日本人はどう子育てをしていたか。

柳田邦男→群れによる子育て

笑いによる子育て

ことわざによる子育て

○江戸時代の子育て

江戸時代末期 江戸時代の育児書 参考書「江戸の親子」中公新書

イザベラバード著「日本奥地紀行」平凡社

オールコック著「大君の都」岩波文庫

エドワース・モース著「日本 その日 その日」

渡辺京二著「逝きし世の面影（平凡社）」

①郡山の子育ては母親 ②子育て子どもたちは地域という場

③労働・仕事に参加 ④生活の中で育てていた

したがって子育て支援とは？☆地域ぐるみの地域力の創造である。

社会全体で子育てできる環境の創造をする。

個人責任だけにしない環境づくり

エンパワー 親のもてる潜在能力を発揮できるように、上から指導するのではなく支援していくことが大事である。

☆支援のための配慮。考え方など

- ・ニーズの把握とそのニーズへの応答
- ・保健師の対応例（育てる側に立ってもらう）

自立の意味をまちがえない→依存しないことが自立なのでは→上手に依存できる人、依存先が少ないほどつらい。

現代の貧困問題をしっかりと念頭におくこと→自尊心の貧困、人間関係の貧困、夢の貧困等

経済的貧困という現代では生み出すか。想像力

子ども食堂の取り組みをどこまでも子ども食堂はたまり場的

アドボカーション、気楽に自分を語れる関係

- ・支援の必要としている人の多くはデリケート
- ・細やかさとていねいさ
- ・東京都江戸川区「ベアテル」の森木さん はじめて来ている人をつないであげる心配りが大切。
- ・親にもタイプがあるとわり切る。
- ・私のかげがえのなさ（自己確認を手伝って欲しいという欲求）
- ・コミュニケーションの2種類

団塊の世代と若い世代の会話。説得、共感をする。

親の自己決定を励ます。（ニュージーランドのファミリーセンター）

対人支援の基本原則＝当事者の自己決定

子どもを「善く」みる練習 していく等。

【講演をとおして明確になったことや課題（制度・人・地域・事業内容など）】

☆江戸時代の育児参考書「江戸の親子」

おむつはずし＝伝統的な子育てである。7ヶ月ではずれていた。

①郡山の子育ては母親 ②子育て ③労働・仕事に参加 ④生活の中で育てた

したがって子育て支援とは

地域ぐるみの地域力の創造

環境の創造 個人責任だけにしない 環境づくり

エンパワー親のもっている潜在力を発揮できるよう母親の自己実現支援をしていくこと。

【子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等】

- ・ニーズの把握とそのニーズへの応答
- ・保健師の対応（マイナス側にいる人にはマイナスの中へ入って後押しをしていく。）
- ・現代の貧困問題をしっかりと念頭におくこと
子ども食堂の取り組みをどこでも行う
（子どもの食堂的たまり場をつくってあげる）保育所等と協働。
- ・団塊の世代と若い世代の会話。親の自己決定を励ます。
（ニュージーランドのファミリーセンター →親の自己決定を励ます。→対人支援の基 本原則
→当事者の自己決定）
- ・子どもを「善く」みる練習をする。

◆10:00～11:15 分科会B 講演

No. B-7 「親達の子育て不安と子育て支援の課題」

広木克行氏（神戸大学名誉教授）



【内容】

「先回りの子育て」の背景にある子育て不安の現状をまとめ、不安の中で子育てをする親達を支援するとはどういうことを明らかにしたい。

◎子育てに現状

- ・親が子どもを思うがゆえに先回りせざるを得ない状況がある。
- ・子どもの能力を少しでも上げようと言う気持ちは誰にでもある。それが発達に即していない親子関係が変質してしまう。
- ・先回りの子育てが悪循環を生み、子どもが悲鳴を上げている。
- ・子育て不安が生まれる。かつての子育て共同体の中で営まれている。大人に守られながら小さい子を守ることで、しっかりと子育ての文化をしみこませている。育児を支える母性は本能ではなく文化である。
- ・文化は親からではなく地域の共同体から学ぶ。
- ・保育・子育て支援がなければ成り立たない。
- ・各年齢の子にどうかかわるかがわからない。
- ・育児の情報があふれている。これが不安産業のひとつになっている。
- ・昔は育児情報はなかった。あるのは遊ぶことだけ。「子どもが育つ条件」 柏木佳子著
- ・幼児期の記録がない
- ・先回り教育が自分が乳幼児期にどう育ったか記録をなくす。

【講演をとおして明確になったことや課題（制度・人・地域・事業内容など）】

《考えてほしいこと》

- ①学習と発達の差異は？
- ②人特有の心的機能の特徴は？
- ③就学前までの人の子どもの心的機能の発達を支援する社会実像の可能性

【子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等】

◎メンタライジングシステムが円滑に発達できる保育での環境は？

- ・前頭葉をしっかり働かせる機能を作ること。
- ・親がまだ成長している時期ということを理解することが必要。

何故、親が今苦しいのかわかれば楽になる。

→第三者からの問いかけ、想像性の選択肢を具体的、多様に提案、提供しイマジネーを働かせる

◎母： 鬱、妊娠中

第1子、指差しせず、発達障害 AD/LD, 小学3年 子どもと親の支援をどうしていくか？

上の子が見ている世界が他の子が見ている世界と違うことを親に理解してもらおう。違うことは悪いことではない。→確認できるメンタライジングシステムができているのかどうかを考えていく環境がとても大切 子どもたちの身体と心のあり方を示すようになる言動を分析し、その内容と「先回りの子育て」との関係について考えます。

◆10:00～11:15 分科会 B 講演

No. B-8 「ヒトの心の誕生と進化の道すじをたどる」
明和政子氏（京都大学大学院教育学研究科教授）

【内容】

ヒトの心的機能の個体発生を胎児期から辿るとともに、その進化的、生物学的基盤を議論します。

演題「子どもが育つ・親も育つ 比較認知発達科学からのアプローチ」

演者 明和政子氏（京都大学教育学系教授）



前半分科会 A 「ヒトの心の誕生と進化の道すじをたどる」にひきつづき「ヒトらしい心の働きとは」について考えていく。次の①～③がポイントである。

- ① ヒトに特有の心の働き（生物としてのヒトがもつ独自の心的機能）
- ② それはどのように進化したか（心的機能の系統発生、生物学的発生）
- ③ それはいつ、どのように獲得されたか（心的機能の個体発生）

・ヒトらしい心の働きには、心の発達そのものと良質な環境が必要である。遺伝か環境かではなく両方セットでとらえること。それは

- ① 胎児期からの心の連続性
- ② 環境として親の発達 $\text{Gene} \times \text{Environments} \times \text{Age}$
- ③ 双方向的な営み

であり、どの時期にどのような環境が必要かということ整理しなければならない。これは生物の発達における臨界期・感受性期・敏感期をとらえ、どんな環境にいるとこの大切な期に有効であるかということである。

胎児は、産まれる前最後の2ヶ月で飛躍的に脳が育ち、大きくなる。その時が脳の感受性期の始まりなのだが、早期産で産まれてしまった子は、その時期をNICUという生物としては異質の空間で育つこととなる。その時に環境からの刺激（視覚、聴覚、触覚など）は満期産で産まれた子どもとは異なるものである。早産子どもに後に発達障害と診断されるリスクが高いことと関係しているのではないか。

・そううつ病の母親の場合は、どう影響が出るか。赤ちゃんの脳に影響が大きいことはわかっており、子どもも発症してしまう。ラットではそれを回復させる試みがされているが、人間に可能かどうかは10年先かもしれない。

・発達障害をとらえるときにも遺伝的要因だけでなく「身体—環境」の相互作用において何が起きているかを科学的に解き明かし、それに基づく支援方法を提案したい。京大では、テクノロジーを使ってデジタル発達評価を行っている。

・「母性」はもともと女性だから備わっているのではなく、出産したら出るものでもない。環境が育てるもので、そのときにヒトの「親性」も育っていく。養育行動をイメージすると母性的な予期的行動をとれるようになる。それはヒトの脳の発達過程から明らかで、思春期～30歳位までかけて前頭前野を使って育っていくものである。

【講演をとおして明確になったことや課題（制度・人・地域・事業内容など）】

ヒトの脳が胎児からどのようなプロセスで育っていくのか。胎生期、出産期、新生児期、そして思春期から30歳位までの長きに渡ってとらえる必要があることが明確になった。

早産期の子が生まれてすぐにNICUという空間で受けるリスクが大きいことも脳の発達の観点から納得できた。母親が母性をもって子どもの養育にあたることができるようになるには、母自身にも脳の成長、変化が必要なのだという内容は、子育てが上手くいかないお母さんたちをみるとき、大変よく理解できた。

【子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等】

テクノロジーを使っての発達評価などで、環境が影響する発達障害の事由を探る。そのことにより、遺伝、生まれつきと思われていることが多い発達障害についての支援の方法を探りたい。

母性や親性は、子どもを産んだから発揮されるもの、育つものではないことを認識し、一人のお母さんが育っていくための環境作りを支援する必要がある。

講師の著書に、ヒトは他者との共感力、信頼力をもって育児を共同作業として進化させてきたとある。ヒトは互いの感情を共感する能力があり、この心の働きが育児の一役を担っているのは確かである。現代において、育児が周囲との共同作業になっていない環境が母親の子育てを困難なものにしている。この環境を少しでも良いものにしていく心づかいや手助けなどが必要である。子育て支援センター、ファミリーサポートなど、まさにこの一助となる活動が求められる。

◆10:00～11:15 分科会B 講演

No. B-9 「子どもと親の生活バランスを共に探す支援」

品田知美氏（城西国際大学福祉総合学部准教授）



【内容】

『貧困化する親子の生活時間』

近頃、親子の生活時間の貧困が叫ばれている。これは収入の貧困よりも問題なのではないか。小さい時は何か勉強を教えるよりも、ゆっくり話を聞いたり関わっていくことを大事にすることであとになって子どもの伸びが違ってくるのがわかってきている。

・欧米では時間が貧困している家族＝収入が高いが、日本では時間が貧困な世帯は収入も低い

・親子の生活時間の貧困化、ゆとりのない生活になっている。

園では年収等知る機会がなく、子どもはすべて平等にという考えが親にも根付いているので本当に貧困かどうかなかなか気づくことがない。しかし結構なやりくりをしている家庭も多く、むしろ生活保護など福祉にかかっている家庭は見えやすいが、そうでない家庭の中にも隠れ貧困が増えているのが現状。

◎親子生活が変化している社会背景

母親の育児時間の増加（おむつ替え、授乳時間など）は1996年と2011年の比較で有業、無業ともに50分程ずつ多くなっているというデータもあるが平均してみたときであり、個別に調べていくと差異が大きくなっているのが現状。「手を掛け過ぎる育児」が苦にならず溺愛と「手を掛け過ぎる育児」に疲れて放任の二極化祖父母や父親の育児参加の格差があり、どちらにもバランスの回復を促す必要がある。

「子ども食堂」などが広がっている背景には、近年の子育て中の親の炊事時間は減少しつつあり、食について悩んでいる親がとても多い。また、食卓を家族で囲む機会は減少している、「子どもと一緒に食べる」時間が極端に少ない人も多い事も背景にあるだろう。

◎親の心理として身体が脆弱な場合には、「免疫力低下により感染症にかかりやすい」「高齢出産により疲労が回復しにくい」「DVや虐待経験がある」「自己肯定感が十分でない」「うつ病、統合失調症などの疾患を持つ人、広汎性発達障害（アスペルガーなど）」「知的ボーダー」の場合がある。

▲様々な人の手を借りていいというアドバイス

→親に合わせた言葉掛けや親の生活を守る言葉掛けと相談が大事

家族の支え合いが脆弱である場合の家族の形態は「一人親である」「手助けしてくれる親族が近くにいない」「夫（または妻）が長時間労働で助け合う状況にない」等

▲家族の関係性 ・子どもとの関係がすでに困難を抱えている（相性の問題もあり）

・夫または妻が、共に子育てする意識に乏しい

・祖父母や義父母など、親族との関係に困難を抱えている

→子どもを預ける時間を確保することも大事

【講演をとおして明確になったことや課題（制度・人・地域・事業内容など）】

◎外国にルーツを持つ子どもたちの存在

- ・父母が日本語を話せないことも多い
- ・一人親になってしまった時のサポート：現代は手薄（大網白里市アンケート調査より）
「どこにあるかわからない」「参加したくない」「参加したことがない、でも日本語がいないなら参加したい」「外国語の情報が少ない」「聞ける所がわからない」が上位3位

◎外国にルーツを持つ親子に必要な支援を考えていく必要がある。

- ▲子育て支援の「場」につなぐアウトリーチの工夫を（支援を受けられることを知らない親が多い）
- ▲日本語力をつけるためのサポート体制
 - ・「日本語ができるようになってから来て下さい」という前提の「日本の学校」という問題
 - *日本語が出来ないが故に学校に行かない子も多い。いかに幼い時に日本語を身につけるか
- ▲情報を届けるための翻訳が求められる（おたよりなども日本語に限られる事が多い）
- ▲日本人がもっと外国語や海外文化を学ぶ（郷に入っては郷に従えだけでは将来に禍根を残す）
- ▲いろいろな人の手を借りていいというアドバイス

◎親も育てる必要がある？・・・相手を知り受け入れることの大切さ

親の育った階層が子育ての常識に強く影響するので、支援をする立場として「自分にとっての当たり前が通用しないことを知る」「支援を求める側は正論ばかりを聞きたいわけではない→共感する大切さ、言葉を選ぶ必要さが求められる。一度相談出来なくなると改めてするのは難しい。

【子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等】

◎身近な支援者であるために

- ▲あらゆる支援の入口は相談である
 - ・何気ない日常会話から、相談に発展する
- ▲「こうあるべき」という価値観から自由でいる
 - ・相談したことで嫌な気持ちにさせない
- ▲共に情報を探す姿勢を
- ▲交流を促すためのしかけを
- ▲DVとの関連性に注意を

*常に視野を広くして自分で情報を探すようにしていく必要がある。

◆10:00～11:15 分科会B 講演

No. B-10 「乳幼児の大規模調査から見えてきた子ども達の姿」

研究報告 大和晴行氏（武庫川女子大学 文学部教育学科 講師）

パネラー 松添直隆氏（熊本県立大学 環境共生学部 学部長／
同大食育・健康推進プロジェクト委員会 委員長／
くまもと食育・口腔育成研究会 会長）

村上史子氏（日本大学歯学部 博士課程2年）

コーディネーター 田中浩二氏（東京成徳短期大学 幼児教育科 准教授／のあ保育園 副園長）



【内容】

講師3氏が乳幼児の調査を通してわかった保育全般と相関する結果を中心に報告をおこなった。

ひとつの大きな調査を3年間行ない、姿勢、体力・運動能力、食生活、口腔構造など多方面から捉えた。

大和氏：「幼児の姿勢・体力・運動能力・手先の器用さに関する現状と課題」

姿勢では、幼児の側面の姿勢画像から姿勢のタイプ（標準型・後弯前弯型・後弯平坦型・ちょい出っ腹〈本研究独自分類〉）を用い、それぞれの割合を算出した。3歳頃は背骨の弯曲の強い後弯前弯型が半数近くを占めるが、加齢とともに弯曲が緩やかになり、5歳では良い姿勢とされる標準型が6割近くになることが確認された。一方5歳で後弯前弯型や猫背等が3割を占めることが確認された。さらに、幼児期の姿勢のゆがみについて、3～4歳頃は頭部や肩甲骨といった上半身、4～5歳頃になると骨盤といった下半身のゆがみが影響する可能性が考えられた。この結果から、姿勢のしつけの際、低年齢では顔部を含めた上半身、年長では下半身も重視するなど、年齢により姿勢教育を行なう際に、保育者が重視すべき身体部分を変えていく必要性が考えられた。足の筋力が少ないので、良い椅子を使っても姿勢は良くならない。首の後ろの筋肉も大切で、ハイハイやあっち向いてホイは良い動きとなる。

体力・運動能力では、各総合得点を低群、中群、高群に分け、その後の推移を表した図から、3歳時点での差が最も大きく、4歳、5歳と年齢が上がるに連れて縮まるものの、3歳から5歳まで高い子は高く、低い子は低いまま推移していく状況が確認された。

手先の器用さについては、箸や鉛筆、ハサミといった物の操作を行う上で重要なハンドスキル（手のひらにコインを置き、貯金箱に入れる）に着目した。2～6歳児を対象に手内操作スキルと呼ばれるハンドスキルについて実態調査を行った。親指を使わない（親指を十分に使用できない）、各指をしっかりと独立させて動かすハンドスキルの低下、各指の独立運動に加え、各指の関節のコントロールを行いながら物を操作するハンドスキルの低下に加え、3指（親指、人差し指、中指）と2指（薬指、小指）の機能十分進んでおらず、5指全てを使用する傾向がある。そのため、本来3指のみで扱う箸、鉛筆、ハサミなどの扱いのぎこちなさにつながっていると考えられる。

松添氏：「3～6歳児の職と生活リズムに関する3年間（2013～2015年）の調査

就寝時刻と食生活（食事内容、食環境）との関連、野菜摂取状況とその他の食生活との関連（幼児の野菜の摂取状況に焦点を当て、食・生活および体力との関連）、排便状況と食生活との関連（毎日便が出る子ども達に着目し、排便状況と食・生活習慣との関連）について、それぞれの目的に沿って調査を行った。幼児の料理摂取頻度は、生活スタイル要因（就床時刻、朝食時刻、保護者の朝食摂取頻度など）、食事の楽しさ要因（食事の楽しい会話、食欲など）、身体活動要因（外遊び時間、メディア接触時間）との関連性が示唆された。さらに、料理の摂取頻度と健康状態（排便回数、体力テスト結果）との関連が確認された。

村上氏：「現代の子どもの顎の成長について」（1960年との比較）

構音、食、歯など口腔に関する問題は多く、言語聴覚分野では口腔構造（歯の生え方）は構音に影響することは一般的であり、3歳児で50%、5歳児で15%が構音の課題を持つが、ほとんどの子どもは自然治癒する。しかし課題を持ったまま小学校に入学し構音機能訓練を受ける子どもが増えている。幼児の身体能力の低下と口腔構造の変化にも関係があるのではないかと考え幼児期の顎が小さくなっているかを明らかにする調査をおこなった。

1960年に行われた口腔構造の計測調査から56年後の子どもたちの顎の大きさが縮小していることが判明した。口腔の不正状況は歯列だけではなく、身体機能へ影響している。

顎の大きさが縮小しているが、それによる影響は更に研究が必要である。

基本的には一つ一つの調査で全体にはつながっていないが、もうしばらく研究を続けていく。しかし、統計、証拠、更に現場（経験）のことをプラスして保護者に発信していくことが大切なこととなる。

◆11:30~13:00 ランチ・交流の場・ランチョンセミナー

①「通信クリニック 効果的な広報メール・便りの作り方」

市川玲子氏

講演の内容：P77~82 参照

■お便り、新聞づくり

新聞らしくない新聞を作ること、見やすいこと、読んでもらいたい。

NO. 10 ■広報より・便りは見た目が大事！ポイントの説明

お便りなどは一度作ってしまえば大変な作業ではない。

参考資料を基に説明していく。

e x) NO. 11 文章を短縮する。

e x) NO. 13→NO. 14名前などは別の枠でくくる。

e x) NO. 15文章を2段にする。

長い文章は読みたくなってしまおう、間に点を入れる。

e x) NO. 16→NO. 17カレンダー NO. 18→NO. 19

数字(日付)のところを網掛の機能を使うと、見やすい。

本屋さんのカレンダーなどを参考にすると良い。

e x) NO. 20→NO. 21 空白で囲むと見やすくなる。

e x) NO. 22→NO. 23 タイトルは大事、一言でわかるもの、読む人がわかるもの

e x) NO. 24→NO. 25 赤、黄、青、黒 4色で色の線を入れる。

また、字体を変化させたり、ポイントのところを赤色を使う。

■メールについて

NO. 26

メールも文章はブロックで打っていく。

相手がどうしたら読みやすいか？

中途半端なところで切らない。

NO. 27

やわらかい伝え方をする。メールは感情が動く。

メールは相手にとってのこと

大事なことは電話で伝えたほうが良い。

気持ちがあることは伝える。

NO. 28

あいさつ文→伝えたい事→めしめ

の順で内容を書く。区別をすること

NO. 29

相手の取り方がある、メールのメリット、デメリット。

とにかくわかるように！

NO. 30

返信は早くする。

履歴は残して返信する。内容が確認しやすい。



まとめ

なるべく最短の方法を取り入れて利用する。

言いたいことは何か

間違えのないように。基本的なこと

- ・ 囲み→空白→囲み→空白
- ・ タイトルを大きくする

これだけで簡単にスッキリする。

一度やってみるとできるようになる。

お便りなど一年間作ればベースができる。

時間をかけずに出来る方法を探す。

フォーマットをいくつか持つことが大事（3～4パターン）

イラストもフォルダーに入れておく。

色を使うときは薄い色から始める。

季節の色、暖色、寒色などを利用するのも良い。

参考のものを作る。雑誌などを参考にしてみる。

真似して利用できるものは利用する。

いいなと思ったチラシなどは取っておく。

既存のものを使っていく。

とにかく活字は怖い！

※前回参加された方の意見

セミナーを受講してから、利用者の方からお便りが見やすくなったと言われた。

色を使ってみた。

センターの場所がいくつかあるので場所ごとに色を変えてみた。

◆11:30～13:00 ランチ・交流の場・ランチョンセミナー

②「保育・子育て現場におけるITの状況と事例の紹介」
倉持孝士氏（株式会社ビズウインド代表取締役）



- ① 今年の内容
- ② 保育業務システムのコンセプト
- ③ 補助金について
- ④ 補助金を使ったシステムの選び方
- ⑤ 保育システムの主な機能
- ⑥ 価格面からみる違い
- ⑦ 保育システム事例（ママれん！メールの事例）

保育現場や子育てをしていく中で、ITを活用できないか、資料（スライド）を見ながらの説明であった。

- ① 今年の内容…保育業務（いろいろな業者が増えてきている）
- ② 保育業務システムのコンセプト…延長保育（お金にまつわるもの）
保護者との連絡が取りづらい
園児台帳の管理・保管
- ③ 補助金について…平成27年度補正予算で組まれた
 - ・実施主体…市町村
 - ・補助金率…国 3/4、地方 1/4
 - ・ICT推進化…システム購入費 最高100万円（園1ヶ所あたり）
 - ・カメラ設置…最高10万円（園1ヶ所あたり）
- ④ 補助金を使ったシステムの選び方…園の運営にあったものを選ぶことが大切
- ⑤ 保育システムの主な機能…主に「運営」と「園児管理」がトレンド
- ⑥ 保育システム事例…スライドの資料を使った説明
- ⑦ 価格面からみる違い…代表3社（Child care system・株式会社 日立システム・コドモン）弊社（ママれん！シリーズ）スライド資料
- ⑧ 保育システム事例（2）…ママれん！スライドの資料での説明

書類作成

園児台帳

指導計画

保育士日誌の作成機能

効率化でできることはしていこうと国が取り組んでいる

統合的管理がなされる時代がくるのではないかと思う→倉持氏

【講演をとおして明確になったことや課題（制度・人・地域・事業内容など）】

ITが進むにつれて、園児管理や保育士の業務が軽減される可能性はあると思われるが、本来の“人と人の繋がり”という面はさらに薄くなっていくように感じられた。

【子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等】

- ・支援センターを利用する人のデータ管理と毎月の予定表の管作成等
- ・利用者数や相談内容等の管理など

◆11:30～13:00 ランチ・交流の場・ランチョンセミナー

③『子どもの身体を育てる歩育の理論と実践』

三原 留美氏（熊本県 山東こども園主任）

H26年度の全国調査結果「毎日排便がある子どもの割合」より、2歳児を境に、毎日排便する割合が急激に減少していた。山東こども園はどうか、アンケートをすると、どの年齢も4～5割程度しか毎日排便がなく、全国のデータより悪かった。

“朝から毎日出る、子どもの身体に育てる”を目標に、快便・快腸チャレンジプロジェクトの取り組みを行う。チェックリストを改善したいと思う保護者に渡す。その回答の中から、生活習慣を変える必要があると思った保護者と面談を実施した。2歳男児の母親と面談すると、0歳から便秘気味で、便が固く時々出血する事があるとの事。家庭の状況、母も便秘、親の思いも知る事が出来ました。そして、母親に3つのチャレンジ宣言を決めてもらい、実施しながら、排便日誌を付けてもらった。チャレンジ結果、10日間の内9日間排便があり、朝からすんなり出た日もあった。

①食事をとる大切さ。（ある程度の量も必要）

②プレッシャーを感じずに「出ればいいな～」と余裕を持って母親が接した。

③本児と一緒にチャレンジするという意識を持った。何より母親の意識が変わったというプロジェクト結果が出た。

園で出来る事は、「運動」⇒3歳未満児の運動量を増やす必要があると考えた。

①十分に戸外遊びを楽しむ。

- ・朝のおやつ後直ぐ外へ、雨の日も外へ出た。
- ・2歳児、1週間で戸外活動は、およそ6時間30分。

②たくさん歩く。

- ・楽しみながら、2歳児でも1.5～2キロ程度散歩を行う。

③たくさん走る。

- ・曲をかけて思いきり。ごっこ遊びの中で追いかけっこ。

以上の活動を1年間取組んだ2歳児が、1年後アンケートを行うと、毎日排便のあると答えた子が、55%から80%になった。運動量を増やしたことで、もう一つの驚いた結果がでた。フットルックで足を見直すと、3歳児の土ふまずの形成が4・5歳児と変わらないくらいに進んでいた。また、浮指の割合がとても少なかった。

まとめ① ～子どもの身体を作るために～

◎3歳未満児の運動を増やすことは、排便の改善のみではなく、身体を支える丈夫でしなやかな足を育むためにも大切。

◎歩く、登る、走る、渡る、跳ぶ等の全身を使った運動が、日常的に出来る環境を作る事。

◎一緒に運動を楽しめる保育者がいること。

まとめ② ～よいサイクルを作る～

“意欲的に身体を動かして遊ぶ”と“食に意欲的な子どもに育ち”“毎日気持ちの良い排便が出来る”“早寝早起きが出来る”そして、“身体を支えられるしなやかな足が育つ”。

上記は、全て繋がっており、互いに影響し合いながら、子どもの賢い身体の育ちを促します。また、科学的に排便や足を見直す等継続して見て行く事が大切である。



◆11:30~13:00 ランチ・交流の場・ランチョンセミナー

④ 新しくわかったアレルギーのしくみ

茂呂 和世氏（国立研究開発法人 理化学研究所 統合生命医科学研究センター自然免疫システム
研究チームリーダー/横浜市立大学生命医科学研究科免疫生物学研究室客員教授）

アレルギーとは何か？

3人に一人はもっている。体が誤認識して過剰な免疫反応を起こすこと。

【症状】

眼・・・結膜炎

呼吸器・・・喘息、花粉症

消化器・・・嘔吐、下痢

皮膚・・・じんましん、かゆみ、アトピー性皮膚炎

全身・・・発熱、アナフィラキシーショック

神経・・・頭痛、めまいなど

泌尿器・・・血尿、蛋白尿



アレルギーマーチとは

アレルギー体質の人⇒症状は変わっていくが別のアレルギーを繰り返す。

大人・・・金属アレルギー

子どもの頃 ①遺伝性アレルギー ②環境アレルギー

小さい頃は食べ物アレルギーが多い →喘息になりやすい →アトピー性皮膚炎、花粉症
→ 重い症状の人は成人型喘息

*衛生環境がよくなってから、アレルギーが増えた。結核が減り、アレルギーが増えた。

*衛生仮説：生まれた時、アレルギーを起こしやすい体質で生まれる。

体の中は2つの免疫機能で出来ており感染症に強い免疫、アレルギーになりやすい体質で
1型・2型免疫に分類される。

1型サイトカイン⇒ウイルス感染、細菌感染

2型サイトカイン⇒寄生虫、アレルギーを起こす

*サイトカインは細胞免疫の役割を決定する

サイトカインはいつも、体中をパトロールしていてどこに必要とされるか判断している。そして細胞を集めたり、抗体を増やしたりする。抗原認識能を持たないILC2（身体中の臓器にいる）は、サイトカインによって機能する。

スキット（免疫不全症）

男性にだけ発症する。サイトカイン関連遺伝子欠損

I LC2(身体中の臓器にいる)の関与が示唆されている疾患

- ① アレルギー性疾患・・・気管支疾患、食物アレルギー、結膜炎、花粉症、アトピー性疾患
アレルギー性食道炎、副鼻腔炎、中耳炎、
- ② 感染症・・・・・・・・・・寄生虫、真菌感染
- ③ 代謝疾患・・・・・・・・・・肥満、糖尿病
- ④ 自己免疫疾患、その他・・・・・・・・潰瘍性大腸炎、多発性硬化症、クローン病、アルツハイマー、
関節リュウマチ、

【子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等】

アレルギー体質にならない為に

- ① 過剰に部屋を清潔にしない
- ② 外で沢山、遊ばせる
- ③ 沢山の人と接触させる
- ④ 薬に頼り過ぎない
- ⑤ 塩素水の使用を出来るだけ避ける
塩素 ⇒ 細菌を殺してしまう

農場で育った子どもに喘息はほとんど発症しない。

酵素を沢山含む食べ物がアレルギーになる。

◆11:30～13:00 ランチ・交流の場・ランチョンセミナー

⑤「午睡をしない保育」

中川浩一氏（山口県子育て支援センター連絡会）



山口県下関では当たり前である3歳以上児の昼寝なしの保育が全国的に見ると稀である事を知り、縁あってアンケートを取ることになった。その結果を報告。

【内容】

①日本の子どもの睡眠について

- ・必要な睡眠時間を年齢別の目安に幅があり、個人差や成長の偏りがある。
- ・赤ちゃんの睡眠の国際比較では、調査参加17カ国中、日本の赤ちゃんの睡眠時間が最も少ない。
- ・22時以降に寝る赤ちゃんはフランス、ドイツに比べて約3倍。
- ・22時以降に寝る3歳児の割合も年々増えていたが2010年には減少。
- ・昼寝をしない子の割合は1980年～10年おきにデータを取ったものによるとあまり変化がないが、福田先生のデータによると、かなり高くなっている。

②午睡と睡眠に関する調査から見えてきたもの

- ・全国8国の午睡状況としては年少では9割が一斉の午睡を行っているが、就学までに段階的に午睡をしなくても良いようにする保育を行っている。
- ・勝山保育園の保育士の午睡に対する考え方
(3歳児は年度の初めはいっせいに午睡するほうが良い)
(4歳児は殆どの子が眠くならないので夏以外は午睡の必要がない)
(5歳児は日中の活動によっては少し、休息程度は必要)
- ・午睡をさせている園の保育士の午睡に対する考え方
(社会性を身につける為)
(心と身体のバランスがマッチングしておらず、疲れても子ども自身では分からないため午睡の必要がある)

③午睡のメリット・デメリット

- ・保護者アンケートによると、家庭では睡眠時間・起床時間・寝起きの状況に殆ど優位の差は見られなかった。
- ・園の午睡に対する親の考え方については、勝山保育園はしたほうが良い、しないほうが良い、分からないがほぼ同数なのに対し、午睡を行っている園はしたほうが良いと多数であった。
- ・就寝時間は殆ど変わらないが分布図を作ってみると、勝山保育園が9:40をピークに上がっていくのに対し午睡を行っている園にはピークがないことが分かった。
- ・幼稚園児は7割近くの子が10時間の睡眠を確保しているのに対し、保育園児の多くは10時間未満。

【講演をとおして明確になったことや課題（制度・人・地域・事業内容など）】

- ・日本の子どもの睡眠は世界的に見て、不足している。
- ・保育園の子どもたちは親の働き方によってかなりの睡眠時間を奪われている。なおかつ遅い時間に寝ることが多くなっている。
- ・全国の保育園の多くで午睡を行っているが、それにより夜眠れずに朝起きられない悪循環を生んだり、眠くない子にとっては苦痛な時間になってしまう事、個人差によっては必要のない子もいる等、午睡をさせる事に疑問

を抱いている保育士もいる。

・午睡をしない場合、休憩時間や話し合いの時間の確保やお便り帳でやりとりが困難になる部屋の活用法の検討等、職員への影響が非常に大きく出ることが課題。

・午睡しないことで入眠までにかかる時間が短くなる。

【子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等】

・子どもたちは何時間寝たらよいのか?保育園に登園してくる子ども達の様子を見て、朝からあくびをする子は寝るのが遅いのかな?よく眠れなかったのかな?と感じているはずである。子どもの睡眠がしっかりと確保されているか把握し、子どもの年齢・体力・個人差を見極めた対応をしていく必要がある。どの職員も一人ひとりの状態把握が出来るような各園によつての仕組み作りが課題となってくる。また保育園での職員の働き方によつて生活のリズムが変わってくるが、そこをどう対応していけばよいのか悩んでいかねばならない。

・保護者に働き方や子ども達の生活リズムを直接聞くのではなく、日頃のコミュニケーションの中で探りながら、各ご家庭が困っている事にアドバイスしていくのも支援。

・職員として午睡の時間を大いに活用したい思いがあるが、子どもの育ちにとっての午睡・睡眠がどうあるべきなのか保育士一人ひとりが自分に問いかけなければならない。メリット・デメリットの部分各園でしっかりと見つめなおす必要がある。子どもの視点、保護者の視点を大切にしながら、午睡が必要なのかそうでないのかを自分で考えていくと共に、睡眠の第一人者である福田先生の話聞いて今後の午睡・睡眠に活かしていけるようにして欲しい。

◆13:00～15:00 分科会（講演とワークショップ）

No. C-11 《ワークショップ》子育て家庭を支える：地域力—つなげる—お互いよろこび

コーディネーター： 木下勇氏（千葉大学）—今後はどうつなげるかを探る

実践事例 地域力① 鈴木栄治氏（いちかわファミリーサポートセンター（協力会員）

産後ケアから小学6までのサポートの活動—保育園団体が運営

地域力② 矢ノ目耕子氏（アンティーン・マミ前代表）

息抜きタイムのプレゼント—一時預かりボランティアの活動

地域力③ 宮里和則氏（品川区おばーちゃんち）



【内容】

鈴木氏：仕事の関係で海外単身赴任をしていたことで、我が子の子育ては奥さんに任せていた。孫が産まれると奥さんから「孫との接し方、分かる？こういうところに行って話を聞いて来たら？」とファミリー・サポート講習会の案内に参加することを勧められた。そこからファミリー・サポートとのお付き合いが始まった。お預かりするお子さんの安全確保に不安を持っていたが、事前打ち合わせのミーティングを経て、打ち合わせて内容通り預かることができた。それ以来、お預かりしたお子さんとお迎えのお母さん・お父さんが笑顔で見つめ合う光景をまじかに見るたび、親子愛の大切さを教えてもらっているような気がする。

ファミリー・サポートの活動をしてみて、不思議に思うことが二つあった。一つは、依頼者とはまったくの初対面なのに、ごく自然にコミュニケーションがとれて、相互理解が図れることがとても不思議に感じる。子どもさんの安全確保について、センターの方、リーダーの方がきめ細かくフォローする体制が整っているのが安心感がある。さらに毎月定期的にリーダー会議が開かれ、活動の信頼性確保にも力を注いでいることが分かった。初対面から良好なコミュニケーションが図れるということは、依頼者と協力者がお互いに共有できる価値観を持ち合わせていると考える。それは、センターの方々がいちかわファミリー・サポートの発足時に掲げた明確な理念を常に押さえていることで人々が集まってくるのだと思う。

二つ目は、ファミリー・サポートの中心にいるのは「子どもさん」。この中心人物はこの世に生まれて間もないのに、人と人を結びつけるすごい力を持っていて、集う人々を笑顔にさせてしまう。この中心人物に導かれ、保育園の先生、送迎中のお母さん、お父さんに出会い、幼稚園、小学校のみなさん、さらにお医者さん、心理学の専門家にも出会うことができた。まさに『筋書きのない上質なドラマ』の連続だ。

会社人間に区切りをつけ、新たなコミュニティーに加えてもらったことで、今までに出会ったことのない世界の方々次から次に登場してくる。どう見てもミスマッチで、普通ならこちらが望んでも、先方は不審者と思いつつ避けていくだろう。まったく不思議な話だ。

「子どもさん」はいつの世も貴重な宝物だ。時勢によって子育ては移り変わっているだろうが、私が幼い時に両親が与えてくれた愛情と、今、出会う方々のお子さんへの愛情になんに隔たりもないと確信している。もし、親子愛の中で何か我々協力者に望まれることがあれば、近くにいて手の空いている人が寄り添えば良いと考える。

矢ノ目氏：アンティーン・マミー（子育てサポーター）とは、《お母さんのような隣のおばさん》という意味で、子育て中のお母さんに「ひとりでがんばらなくてもいいよ」とお母さんに息抜きタイムをプレゼントするボランティア活動をしている。1998年にアンティーン・マミー養成講座を開催してから活動を開始し、現在は、本部をさかえ・こどもセンター置き、市川市内の地域子育て支援センター、4センターが実施し5カ所で活動している。

毎月1回～2回、1歳以上～3歳（就園前）のお子さんを対象にして保育士と一緒に10時～12時まで500

円でお預かりしている。定員は特にはないが、多い時は20名程のお子さんを5,6名のマミーで預かっている。その他の活動は、各センターごとに定例会、全体会として勉強会、総会を行っている。アンティー・マミー養成講座は年に2~3回開催して子どもの発達、遊び、関わり方などを3時間半学んだり、すでにマミーとして活動している人の話を聞いたりする。

幾島氏：ふれあいの家—おばちゃんちでは、5つの広場で25の事業（ふれあい・まなびあい・あずかり16事業／つながりあい9事業）を行っている。子育て支援ではなく『まちづくり』を目指している。以前は、子どもが道で遊んでいる風景をよく見かけたが今は、車のための道になってしまった。公園などでも気兼ねなく遊べなくなった。子どもの遊ぶ姿、育ちが見えるまちを目指し、子どもの声が「うるさい！」ではなく、泣き声～「どうしたんだろう」、はしゃぐ声～「楽しそうだな」「大きくなったな」に変わり、遊び場が子どもだけの場所ではなく近所の大人も利用でき、ともに喜ぶまちづくり。

支援する側、される側を固定しない。お母さん達を支援される人にしないで、母親の学び、活動、社会参画のサポートをする。

木下氏：弧育てと言われる中で、どのように人をつなげていくのか…、どのように地域で子育てしていくのか…。これは、防災面からも重要になってくる。異なるものとどうつながるのか、違いをどう楽しむかが地域づくりの課題である。違う価値に出会い共用し、違いを認め合うことが大切。

グループワークを行い、現在の取り組みやアイデアなどをディスカッションする。

行政でできないことを任意団体やNPOなどが行う。行政は、それをサポートすることが大事である。

【講演をとおして明確になったことや課題（制度・人・地域・事業内容など）】

異なるものとどうつながり、違いをどう楽しむかが地域づくりの課題である。

地域がもっていた社会関係を、どのように新しく構築できるか、地域のそれぞれの持っている資源や人材を活用して地域内の関係を再構築していく。

【子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等】

支援者、被支援者という意識をなくしていく。

利用者が主体的に活動できるようにしていく。

◆13:00～15:00 分科会（講演とワークショップ）

No. C-12 《ワークショップ》 虐待・貧困の連鎖を断ち切るには

演題

「つながる・寄り添う・支え合う
行政と民の連携を考える」



演者（コーディネーター）鈴木眞廣（富津市 子ども子育て会議副会長/千葉和光保育園園長）
（先進事例発表） 並木美佐子（浦安市 子ども部子ども課 少子化対策室 室長）
下間節子（富津市 子育て支援課 課長）
山崎律子（名張市 こども支援センター かがやき センター長）

浦安市（妊娠中からの子育て世代包括子育て支援：個別子育てケアの価値を探る）

津市（ゆメール：行政）出産予定者の全員に子育てワンポイント情報の提供。繋がるを大事にする。

名張市（妊娠・出産・出産後のワンストップケアの価値と地域力の資源との連携・発掘）

子育てから高齢者までワンストップで支え合い。今後の各市町村として取り組む方向性について、示唆に富む内容となります。

【内容】

①浦安市「浦安版子どもネウボラの構築～切れ目ない支援を目指して～」

○子育て家庭を取り巻く課題として、身近な相談者の必要性。子育てに対する精神的、身体的な負担感など様々な要因と少子化対策を含め、子どもプロジェクト事業に取り組んでいる。

（子育てケアプラン作成の状況について）

・妊娠～出産～子育てに渡り、切れ目のない支援として3回のケアプランを作成し、保護者とともに子育てについて考える。

（総合窓口としての子育てケアマネジャーの重要性について）

・「相談しやすい環境」「市民に寄り添った敷居の高くない相談」を考える。

（こどもネウボラの整備について）

・母子保健と子育て支援の拠点を浦安市健康センターに集約したことによるメリット

②富津市「妊娠期からつながる子育て支援。行政と民間の連携価値を探る」

○子育て家庭に対し「マタニティ期」「未就園期」「学齢期」に分け、独自の対策に取り組んでいる。

（子育てに係る情報発信を円滑にするための子育て応援はがき「ゆメール」について）

・マタニティ期から満3歳の誕生日まで月齢に合わせた子育て情報をはがき1枚に載せて対象児のいる全家庭へ郵送。

・個人宛てに届くことにより、孤立しがちな子育て親子にもつながっているという安心感を届ける。

（社会情勢の変化による今後の課題について）

- ・情報発信の手段を考える
- ・情報量が限られる。タイムリーな情報が届けにくいなどへの対策。

③名張市「名張版ネウボラとは、ポピュレーションアプローチの視点による妊娠・出産・育児の切れ目のない予防的効果」

○子どもを産み育てるにやさしいまち「なばり」を念頭に、子育て支援事業「名張版ネウボラ」に取り組んでいる。

- ・切れ目のない支援への3つのネットワークの確立について

1. 人と人・人と地域をつなぐ
2. 妊娠前から、出産・育児期までの時をつなぐ
3. 保健・医療・福祉の仕組みをつなぐ

・少子高齢化対策として、保健師・保育士が共に事業に係ることによるメリットについて 子育て支援を目的にした取り組みのプロセスが地域住民間の関係性の再構築を促進し、介護予防、生涯現役のまちづくりとして発展。

【講演をとおして明確になったことや課題（制度・人・地域・事業内容など）】

・子育て支援事業は、行政や関係機関と連携・協働し、それぞれの地域性を活かしつつ様々な世代の力を得ることにより、より良い支援になっていく。

・切れ目のない支援の大切さとして、浦安版ネウボラ、名張版こどもネウボラの取り組みの実践事例や富津市における妊娠期からつながる子育て支援（はがき通信「ゆメール」）の事例から、より多くの子育て家庭への情報発信の方法や孤立しがちになってしまう子育て親子のための対策など、具体的な事例をもとに、人と人とのつながり、いのちの循環（未来のお父さんお母さんを育てていくこと etc）のために、安心して子育てしていける環境が、いかに重要かを考える。

【子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等】

- ・地域の特性を生かし、地域に密着した子育て支援事業を考える。
- ・行政と保育の現場が手を取り合い、子どもの育ちとともに、親が育っていくこと大切さを心掛けながらともに支え合い、より良い支援事業が展開されることが大切。

◆13:00～15:00 分科会（講演とワークショップ）

No. C-13 《ワークショップ》 支援センターで始める妊娠期からの家族支援の価値を探る

川部利香氏 助産師（船橋中央病院看護学校専任講師）

演題：「支援センターで始める妊娠期からの家族支援の価値を探る」

演者： 川部 利香氏（JCHO 船橋中央病院附属看護専門学校 看護学科教員）

（さかえこどもセンター嘱託助産師）



【内容】

助産師として子育て支援センターに関わり、保育士と主に家族支援をしている演者

現代社会の現状…〈産後クライシスを知る〉～あぁすれ違うパパとママ～

ワークショップ1.「子どもが何歳の時に離婚したか」と言う母子世帯調査によると「0～2歳」期が多い。隣の席と「0～2」「3～4」「5～6」のどの年齢が多いか話し合ったところ「0～2歳」ではないかという意見が多数であった。

では、なぜ〈産後クライシス〉と呼ばれる問題がおこるのであろうか。それは、父親にとっては「雑用」と捉えている事が、母親にとっては最もエネルギーを消費している事。以前は「父親に家事・育児を積極的に関わって欲しい」と支援していたが、現在では「妻をもっと知って欲しい」に変更されてきている。産後は妊娠中に比べ夫婦関係満足度は低下していくと言われており、原因としてコミュニケーション不足と期待度の違いが見えてくる。

《20分間を使ったグループワーク》

テーマ「みなさん、ところで産後はどうでしたか？」保育士ならではのコメントなど様々な意見が出る。産後の心理的側面の中で、子どもを持つと言う事は「与える」と言う事を選び、「与える事」を喜びとする事である。その為「与えてもらう事」がとても少ないと感じられるとR・ルヒン氏が言うように母親の時間に至るまで与え続けている。その為母親の心を満たし、子に「与え」ても心が擦り減らないよう他者からの支援が必要である。産後の身体では様々なホルモンにより子育てに向かうことができている。バソプレッシン（保護ホルモン）、オキシトシンホルモン（愛情ホルモン）、プロラクチン（母乳分泌ホルモン）→ホルモンを分泌させる為に母乳を与える。

添い寝をする、夜間の授乳をする、抱っこやおんぶをするなどがある。その反面、産後うつ病を発生しやすく、産後1～2か月が最も発生しやすいと言われている。こうした母親の抑うつ病状は状況により発生しており、状況が変化することにより改善されやすくなる。また妻の出産後3～6ヶ月頃父親にも抑うつ傾向が見られると言う。

【講演をとおして明確になったことや課題（制度・人・地域・事業内容など）】

- ・父親に「妻について知ってもらう」
- ・母親が子に「与える」事ができるよう、母親の心が満たされている事が必要である。→夫、地域など他者の支援
- ・妊娠期からの関わり、地域全体での支援
- ・支援の早期化
- ・支援センターで母親がリラックスする事ができる信頼関係を作っていく
- ・利用者同士が関わり、支え合えるセンター作りをしていく

【子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等】

- ・グループ活動や、地域に加わるなど、安らぎと結びつきシステムを活性化させる
- ・子育て支援センター等の場所と結びつく
- ・妊娠期から地域全体で支えていく→親を地域の中で孤立させないよう支援する
- ・産後うつ病の予防として、支援センターで妊娠期からの関わり、アドバイスしていく
- ・1ヶ月健診後、支援センターに来てもらう
- ・母親の横に寄り添い、タッチング『生物学的スキル』として取り入れていく（40回/分）
- ・体自体の持つ成長と発達と治療を促進するメカニズムを知り、活性化させる手伝いをしていく

◆13:00～15:00 分科会（講演とワークショップ）

No.C-14 《ワークショップ》 葛藤する支援者対策：ストレスを抱えない支援者の心得と援助技術

援助の心得①：木村弘美氏（社会福祉法人愛の泉 ホームスタート・かぞ）



「訪問型子育て支援ホームスタートの実践から学ぶ」

援助の心得②：大岩孝司氏（さくさべ坂通り診療所 院長 Dr.）
緩和ケアのドクターの実践から学ぶ

援助の心得③：柴崎伊津子氏（いちかわファミリーサポートセンター長）つなげる援助技術の実践から学ぶ
寄り添う支援者のあり方：支援者の心得と援助技術を実践から学ぶ

コーディネーター 甲斐 恵美氏（さかえ・こどもセンター/風の谷こども園 副園長）

演者①大岩孝司氏（さくさべ坂通り診療所 院長）

「在宅緩和ケアの現場の話」

千葉市にある大岩先生の診療所は、がんの終末期の患者を診察している。外来は、一週間で2～3人で他は全て訪問による診察を行う。

最初のお話しは、8歳の女の子莉歩ちゃん（保護者の本名で紹介してほしいとの希望があり実名公表）の初日から最後まで治療経緯を詳しくお話し頂いた。

病名は平滑筋肉腫（腹腔内腫瘍で腹部膨満高度）で病院から家に戻り、訪問治療を始める。初めての日「痛い痛い」と布団にもぐり顔をささなかった。その様子を見た家族は、「点滴は」「痛み止めは」と声をかけるも顔を出してくれなかった。そんな中、莉歩ちゃんが「氷水が飲みたい」と言う。母は氷水では冷たすぎて吐いてしまうと心配し、「ただの水」を用意したが、「違う！！氷水って言った。私の言う事を聞いてよ！！」と訴えられる。そして、訪問に来ていた看護師が「吐いてしまうかもしれないけど飲んでみる？」と聞き、頷いたので「氷水」を用意したら、勢いよく飲み、「おいしい！ジュースが飲みたい、葡萄と桃」。そこでお爺ちゃんがコンビニに行ってくれた。莉歩ちゃんは改めて家族みんなに大切にされていることを感じる事となった。翌日、「痛い、痛い」しか言わなかった莉歩ちゃんと、痛みをとる方法の相談が出来る様になった。莉歩ちゃんの願い・思いを受け入れることで、本人が大事にされたと感じ態度に変化が見られ良い方向に進むことになっていった。家族は患者の事を思いやる余り、意思が通らず認められていないと本人は思っている場合がある。患者の思いに沿った専門家として提案がされたことによりその後の家族との関係は最後に至るまで良いものとなった。

期待と現実にズレが生じるとうまくいかないため、患者を起点とした、事実に基づいたコミュニケーションが必要である。また、患者に応じた情報提供、相談（指示ではない）が必要であるとのこと。

専門家とは、

- 1 人の思いを尊重しその人の自由度を最大限に許容できる能力
- 2 人に関わる言動には必ず根拠を持つ これらが患者の自己実現への道となる。

演者②柴崎伊津子氏（いちかわファミリーサポートセンター センター長）

「ファミリーサポートについて」

支援にあたって大切にしている事

☆一人ひとりを尊重し相手の心に耳を傾ける

こちらに力が入り緊張感があると駄目で、力を抜いて向き合うと相手が信頼をしてくれ、心の中を見せてくれるようになる。

☆価値観は大切な宝物

人の価値観は個人の宝物であるから他人と比較したり、相手の宝物に物を申すことはできない。宝物は持ち歩かず、相手と向き合うと、その方を大切にすることができて楽になれる。

☆ルールについて

人は少しでも何か違うと思ったら、指導したくなりルールに当てはめて縛ろうとする。気持ちの良い関係を築くには、どのようにすれば相手を尊重出来て、お互いに気持ち良く解決できるか解決策を考えるようにする。あくまでもそれぞれの思いを大切にし、尊重することで、心穏やかに解決できて優しい気持ちになれる。

☆「かわいい」という言葉は最上級の褒め言葉

いつでもどこでも出会ったお子さんにはまず「かわいい」と何度もいってあげる。「頑張ってる」という言葉では頑張れないのですが、「かわいい」という言葉は、頑張れる原動力になる。

☆優しさとあたたかさは万能薬

子育て中の方には、誰にでも子育ての大変さを共感する事と、頑張ってる子育てをしている事を肯定することが大切。

どんなことでも受け入れる。そして、相手はいつか変わると信じる事が大切。

演者③木村弘美氏（社会福祉法人 愛の泉 ホームスタート・かぞオーガナイザー／子育て支援センター愛の泉 ふれあいホーム地域福祉主任）

「家庭訪問型子育て支援ホームスタートの実践から～傾聴と協働からうまれるもの～

家庭訪問をする意味とは支援センターで聞くことのできない孤独感を知る事ができる。ホームスタートを利用している人は育児不安で家から出られない、双子の子育てで頼れる人がいなく子育てに不安を感じているなど孤独を感じている人が多い。その中で大切にしている事は、

- ① 親子が持っている成長する力を信じる
- ② 当事者が自分の力で悩みを解決していく過程に寄り添いながら、見守り、共に考える（傾聴力）
- ③ 当事者自身の力を信じ、その力を引き出していくような関わり方や援助（エンパワーメントの視点）
- ④ 孤立感を感じている家庭が次の一步に繋がる支援

常に相手の立場で物事を考え、話を聞いてあげる事、自分の意志を伝えるのではなく相手がどうしてほしいのかを見極め一緒に進んでいくことが大切である。

まとめ

支援者は、当事者が望むもの、欲しいものを与える。相手を認める、相手に光を当てる、相手が望んでいることだけに支援を行う。気を回してそれ以上のものを与えるのは押し付けになってしまうのではないだろうか。

寄り添うことの中に聴く事がある。聴く事で気持ちに寄り添う。相手は、思いが伝わったと思い、支援者は相手を大事にする。

◆13:00～15:00 分科会（講演とワークショップ）

No. C-15 《講義とワークショップ》

「子どもの夜更かしの危険性とそれを防ぐ手立てとは」～保育園の昼寝を考える～

福田 一彦氏（江戸川大学社会学部教授・江戸川大学睡眠研究所長）

日本は世界中で最も夜型化の進んだ国である。それは大人だけではなく、幼い子どもたちも含む。講演では、その危険性や対処方法について具体的に説明する。特に保育園で行われている昼寝の問題に言及する予定である。



「子どもの夜更かしの危険性とそれを防ぐ手段とは」

□ 眠りのデマ 以下の認識はすべて間違いである

- ・ 夜10時から12時はお肌のゴールデンタイム
- ・ 90の倍数で眠るとスッキリ目覚める
- ・ ホットミルクを飲むとよく眠れる
- ・ レタスを食べるとよく眠れる
- ・ 青は「鎮静色」なので寝室の色にオススメ
- ・ 運動すると眠りが深くなる
- ・ 睡眠時間は8時間以上が理想
- ・ 入浴でリラックスして眠りを促す
- ・ 枕やマットレスの選択は睡眠に重要
- ・ 休みの日は睡眠不足を解消するよう長く眠るべし
- ・ 羊の数を数えるとすぐ眠れる

以上のことはすべてデマである。この根拠を探りながら話していく。

- 保育園児は就床時刻が遅く睡眠時間が短い。夜更かしの原因は昼寝である。夜遅く眠り朝遅く起きるリズムになると、朝子どもが起きられず保育園に行き渋る。昼寝をしないと子どもが早く眠くなるので、親が早めに迎えに来るようになる。子どもの生活を考えたら、昼寝をしない方が早寝早起きにつながる。
- 眠りを左右するふたつのホルモンがある。ひとつはコルチゾール（リズム型のホルモン）でもうひとつが成長ホルモン。コルチゾールは生物時計としての体内時計に支配されているため、昼夜が逆転しても関係なく分泌される。一方成長ホルモンは寝ている間の前半に出るので、何時に寝たかは関係無い。しかし、睡眠・覚醒とホルモンのバランスにずれが生じると非常に問題となる。うつやガンの原因ともなっている。
- レム睡眠は平均すると90分ごとに出ると言われているが、だいたい1～2時間くらいの間に出る。レム睡眠は浅い眠りだが起きにくい。つまり覚醒には向かないのである。レム睡眠の途中で起きると夢を覚えている。
- ダニエル・クリプケ（カリフォルニア大学）は睡眠時間と死亡率の相関関係を導いた。睡眠時間は長くても短くても死にやすい。成人ならば7時間程度がベスト。また、中性脂肪と善玉コレステロールは睡眠時間が多くても少なくとも、多くなる（中性脂肪）し少なくなる（善玉コレステロール）。
- 不登校の高2男子の一年間の生活リズムと家庭内暴力の発生についての調査では、睡眠覚醒のリズムが悪いと家庭内暴力も多いが、睡眠覚醒のリズムが良いと家庭内暴力の頻度は下がっていくと明確に出ている。また、不登校の原因No1は「友人とのトラブル」だが、No2は「睡眠の乱れ」ということである。睡眠は気をつけていないと簡単に後ろへずれていく。

- 世界の中でも日本の睡眠時間の短さは突出している。高校生・大学生はだいたい6時間くらいだが、睡眠の短さがイライラや不安といった心理的病理の原因にもなっている。また昼夜のメリハリがないことも問題。帰宅後、一度短時間の睡眠をとってから勉強をするというリズムは、返って勉強の成果の妨げになっていることも多く、イライラは仮眠をよく撮る人に多い、という調査結果がある。(睡眠の分断)
- 未就学児のいる全国1,000世帯へ①起床時刻②朝食時刻③就寝時刻④夕食時刻について聞き取り調査をし、生活リズムと日中の調子の良さの相関関係を調べた。
良かったのは、すべてが速い群。悪かったのはすべてが遅い群。だが顕著だったのが、平日は速いのだが休日は①②③が遅くなる群だったこと。この群はすべてが遅い群より返って調子が悪かった。「睡眠を貯める」ことには無理があり、良かれと思ってしていることが裏目に出ているということが明らかになった。
- 生活習慣と乳ガンの相関性の調査でわかったことは、ガンリスクの高い職業は「交代制勤務」の人だということ。放射線技師より交代制勤務の方がガンの発症率が高かった。WHOのTRACの調査でも発がん性リスク第1位は「タバコやお酒によるもの」で、第2位が「交代制勤務者」となっていることから明らか。睡眠を含む生活リズムの乱れは命にも関わる一大事だということである。
- 眠りは体温が下がらないと訪れない。子どもは夕飯より入浴を先にし、入浴後1時間程度してから布団に入るのが望ましい。

保育園では3歳以上児には昼寝をしない方が望ましいとの提言に、これまでの「当たり前」を見直す必要性を非常に感じた。

◆13:00～15:00 分科会（講演とワークショップ）

No.C-16 「乳幼児とスマホ・ゲーム・テレビ～なにがよくない？こうしてみよう！」

～明日から取り組む保護者へのアプローチ～

古野 陽一氏（NPO法人子どもとメディア専務理事）



乳幼児にスマホ、ゲーム、テレビ…「とっても気になる、これじゃよくない…」 心の中でそう思いながら、でもどうして良いかわからない。まず、なにがよくないのか、なぜよくないのかしっかり学びましょう。

【内容】

例題：10ヶ月の男児

10ヶ月→テレビを親が見ながらミルクを与えている。

1歳→呼んでも子の応答なし

1歳10ヶ月→喋らない

2歳2ヶ月→目を合わせない、指差ししない、呼んでも振り向かない、言葉が出ない

↓

テレビの子守りは危ない、言葉遅れの子ども達になる確率高い。

電子メディアを1日2時間以上見る。子どもが電子メディアを好む。

↓

過剰接触になる症状かもしれない。

以下があてはまるようなら電子メディアによる影響も考えられる。

- | | |
|-------------|-----------------|
| ・表情が乏しい | ・落ち着かない |
| ・視線が合いにくい | ・遊びに集中出来ない |
| ・呼んでも反応しない | ・人をすぐに叩く、蹴る |
| ・指差ししない | ・大人しく子どもらしさがない |
| ・言葉が出ない | ・子供同士の関わりがない |
| ・オウム返し | ・ごっこ遊びをしない |
| ・一方的に喋る | ・イライラ、不機嫌なことが多い |
| ・手先が上手く動かない | |

「育ちの取り組み」をやる必要がある。

- | |
|-------------------------------|
| ・テレビを見せない→布を掛けて隠すと良い |
| ・ゲーム、スマホ、タブレット、パソコンに触らせない（隠す） |

↓

見えない所、手の届かない所に隠す。

- | |
|---------------------------------------|
| ・声掛け、語りかけ、体を使った関わり合いを増やす。（抱っこ、こちょこちょ） |
|---------------------------------------|

良い点

- ・直ぐできる。
- ・全く害がない。 → ・やってみて損はない。
- ・お金がかからない。
- ・相談、診察、診断を待っている間にもやれること。

「育ちの取り組み」をやったら

2歳4ヶ月→まだ言葉は出ない。

3歳1ヶ月→甲高い声が出た。ごっこ遊び。

洗濯物干しの手伝いも出来る様になった。

家族の音が聞こえる。

↓

男児の表情も良くなった。

*取り組むことで、最初は泣く、大暴れをするがほとんどの場合、数日でおさまる。

劇的な変化があることが多い。→それだけ影響が強い。

*数日間の取り組みでも親にとっては大変。→この時期の保護者へのサポートは重要

早いと1～3週間位で変化が見えてくる。

- | | |
|--|---------------------|
| <ul style="list-style-type: none">・表情が出てくる・遊びに集中出来る様になる・機嫌が良い時間が増える・関わり合いを喜ぶ・生活サイクルが整う | →変化があまりない時は早めに発達診断へ |
|--|---------------------|

良い変化があるなら、半年～1年位は続ける。

*テレビやスマホの影響で育ちが遅れた場合は、その部分を「育ち直す」

*見せ始めの年齢が早いほど、影響は根深く時間がかかる。

子どもによって影響は異なる。

- ・電子メディアの影響は子どもによって異なる。
- ・接触時間が短くても影響が出る。
- ・接触時間が長くても影響が出ない場合がある。

電子メディアを断つと子どもが暴れて親が疲れてしまう場合

→「他の楽しいこと」を探しつつ無理しすぎず、減らす。

センターの活動、色んな親との関わりを一緒に探してあげる。増やしてあげる。

感想・今後どう生かすか？

大人にとっては便利な電子メディアだが子どもにとって、特に2歳未満の子には必要性のない事、また電子メディアに頼って子育てするとどれだけ悪影響かを知ることが出来ました。どんな親でも子どもには良く育てたいと思っているので、まずは聞いてみることから始めてみる。それには、毎日の声掛けでじっくり聞いて、悩みが出てきたら電子メディアとの関わりを聞いてみようと思う。電子メディアに頼りたくなる親の気持ちも汲み取りながら寄り添う子育て応援者になりたい。

◆13:00～15:00 分科会（講演とワークショップ）

No.C-17 「子どものありのままが育つ場と大人のあり方」～自然の中での子育てのススメ～

野村直子氏（森のようちえん運営委員）

十人十色の子どもたち、一人ひとりの個性を保育室の中で引き出すことは至難の業。自然という豊かな資源の中で、子どものありのままを育み、大人も自然を共感する…という

保育の形を、ワークショップを通してお伝えします。



演題「子どものありのままが育つ場と大人のあり方」

【内容】

野外プログラムの内容

・3人以上の人と自己紹介、握手・質問

・ゲーム①自然の中の色を数える

木の色、葉の色、すべて違う。数え方は人それぞれで良い

・ゲーム②フィールドパターン

4人で1グループ。○や△など自然の中から11の形を探す

・ゲーム③カメラゲーム

2人1グループ。相手に見せたい風景を探す。

日本の森のようちえんは幼稚園の形や保育園の形、また夏休みや週末、午後のみ、週1回等のイベント型、様々な形態がある。

森のようちえんの始まりは、デンマークの一人のお母さん。森のようちえんでは3つの大切にしていることがある。 ・いっぱい遊ぶ ・自然を感じる ・自分で考える

→『自然体験活動を基軸とした子育て・保育、乳児・幼少期教育の総称』と定義づけられている。（「森のようちえん全国ネットワーク」HPより）

【体験学習のラーニングサイクル】

やってみる→感じる→考える→またやってみる→次のステージへ…

子どもと何をするか、何を残すか、どう遊ばせるか等の結果に目が向きがちだが、180度視点を変えて、子どもがどうしているか、どう感じているか、どう遊ぶか等のプロセスを大切にしていく。保育者は子どもに寄り添い、一緒の目線で考えることが大切。

子どもの自然の中での体験

・冒険的な遊び

子どもは高い所や不安定なところが好き。その中で危機感やチャレンジする心が育っていく。しかしそれは強制するものでなく、子どもが選ぶもの。力試しに登り始めたら保育者は見守る。登りきることが目的ではなくてもいい。

・感性的な体験

大人は知識を知ろうとするが、子どもは感覚が大切。なんだろう？と子どもが思う気持ちを大切にしていく。体験がないと頭に入ってこない。一人ひとりの体験が知識に、知恵になっていく。

自然の中での様々な体験

チャレンジ・挑戦、制限がない、想像的な遊び・ファンタジー、感じる・感覚的な遊び、想像的な遊び、本物体験・実体験、不規則であり規則的でもある。

→自然には大人が用意する遊びはない。木の枝が魔法の杖になったり、切り株の穴が鍋になったり。子どもが想像して遊びが広がっていくことの豊かさもあり、危険もある。しかしその危険も子どもには価値のある体験となっていく。

アドベンチャー教育からの観点から

アドベンチャーという体験を通して、成長と変化を促す。

コンフォートゾーンの外にストレッチゾーン、その外にパニックゾーンがある。できそうでできないストレッチゾーンを繰り返すことで、安心できる快適なコンフォートゾーンになる。ストレッチゾーンがあるからこそコンフォートゾーンが広がっていく。パニックゾーンに行かないようにすることが大切。自分の力でできないことはさせない。障害を持っている子どもはコンフォートゾーンが狭く、パニックゾーンが広いことがある。その子をもものストレッチゾーン、パニックゾーンを見極める。

保育の中でのファシリテーション

ファシリテーションとは議題が円滑に進むように交通整理をすること。ビジネスの中でよく使われる。

ファシリテーションの4つのスキルを子どもへのファシリテーションに当てはめる

1. 場のデザイン：心や身体の子どもの状態、天候気温などの自然環境状態
2. 対人関係：ここのやりたいことを認める、共感する。子どもだけでなく親の意見もすべて尊重する。
3. 構造化：子ども一人ひとりのやりたいことができるように支援。子どもから出てきた意見をまとめたり、2つに分けたりする。
4. 合意形成：子どもたちが選択しやすいようにする。皆が納得のいく決定に導く。

大人の意見が強くなるように聴くこと、やりたいことが子どもたちから出てくるのが大切。

IN と OUT の関わり方

IN リーダー…停滞している状態での遊びのきっかけ作りが必要。子どもたちの中に入ってガキ大将のような役割をする。

OUT リーダー…子ども同士での遊びが始まり、子どもたちが遊びに没頭したら保育者は見守る。

保育者は子どもたちの中に出たり入ったり、関わり方が様々。1日の中、日によって、季節によって違う。

子どもたちは体験を通して成長し、次の行動へ移っていく。これは自然環境の中での体験だけでなく、人間関係でも同じことが言える。子ども同士でも子どもと大人でも言える。合わさって複雑になっていく。

自然環境の中での成長も様々。自然の中では豊富な体験が可能。子どもが自ら体験を選んでいく。それが成長によってここに違う体験となる子どもと自然環境の間に様々な要因が影響し、様々な体験となる。

子どもの体験には内的な体験、外的な体験の2種類がある。

外的な体験では身体が成長したり、できるようになったり、知恵がついたりする。内的な体験では感性が育ったり、心が成長したり、感覚の認識力がつく。それぞれの体験が容易にできるのが外遊び。

人工的な環境の中での体験は体験が限られて画一的なものになりがち。大きな怪我は人工物が多いところで起きやすい。

安全についての捉え方

学びにつながるリスク→ヒヤットとする体験や失敗体験、自分で感じる危険は乗り越える力や危険回避する力になる。最初から排除するのではなく、体験することで子どもは学ぶ。体験させてはいけない危険→命にかかわるもの、子どもが予知できない危険は子どもには回避できないハザードとなる。大人が危険だと知っていながらとめないのは間違っている。

YESの土台に

ありのまま・そのまま・あるがままでいい、肯定的な土台が基にある。子どもの感じたことが大人の意に反することがある、保育計画のねらいに沿わないこともある。そのままの子どもの姿を保育者は受け止める。その中でも子どもの心と身体の安全が保たれないときは体を張り **NO** と言う。子どもの心と身体の育ちを客観的に観察する。

YES の土台に大人がいることで、大人の在り方や行動も肯定的になる。その結果子どもの育ちが未来を創る。未来は大人にもわからない、今までの概念を押し付けるのではなく、子どもが考える。

子どもをどう捉えるかで大人の関わり方が変わる。子どもは教えなければ分からないと捉えていると大人の行動は与える、教える、補うための保育・教育になる。子どもは持って生まれた力があると捉えていると子どもの力を引き出す保育・教育になる。そのためには子ども一人ひとりを観る目と扱うスキルが必要になる。

今までは一人のリーダーに従う時代。こうして様々な文明社会が発展してきたが、これからは一人ひとりが活躍する時代になっていく。今までの時代とは違うものが求められる時代になっていく。

「お散歩子育て支援やってみませんか？」

9時半ごろに公園で親子とゆるく集まる。大きい木の下に保育士が2人待っていて、予約の必要はない。集まった親子と公園の敷地内を散歩する。「なんとなく」を含んでいるので少し遠くにいる親子にも軽く声をかける。自然の中だと勇気の出ない親子も解放的に参加することができる。また靴を脱がなくて良いことも敷居が低く親子が参加しやすい点。ひらけた自然の中でやることで相談もしやすい空間となっている。

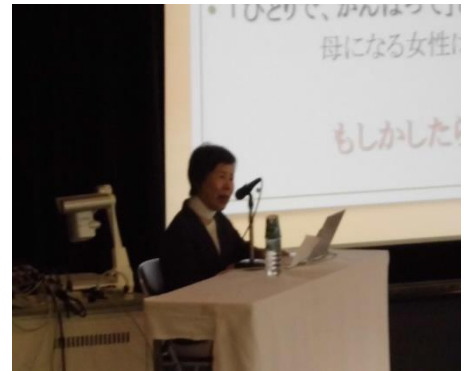
ブレインストーミング

・自分の職場の周りにはどんな自然がある？自然を保育資源と考えて、講座を通して自分に出来そうなこと、帰ったらやってみようと思ったことを挙げる

◆15:15～16:45 市民一般公開 講演会「赤ちゃんと言葉あう 親が親になるということ」

お子さんとの絆が生まれる不思議さ・・・

講師：橋本洋子氏（山王教育研究所 臨床心理士）



【内容】

○一人では、母になれない。周囲に守られてこそ母子は育つ。

○頑張ることでは、母になれない。

- ・ パーフェクトな母ではなく、ほどよい母になること。
- ・ 母になっていくプロセスは、努力とも意識とも遠いもの。
- ・ ネガティブな思いをもってられること。

○出産直後の母子の早期接触、いのちの交流、関係、カンガルーケアの大切さ。

いのちが出会い、つながっていく様子を感ずることができる。

○出産、出生直後の親子に起きていること

皮膚を通しての交流。音声を通しての響き合い。視覚的交流。臭覚による交流。

言葉や意味のレベルでのコミュニケーションの底流にいのちの響き合いがある。

○父親は、赤ちゃんとの関係を育み、親として子どもと向き合う。誕生プロセス、親になるプロセスを母親と共有する。母子を守る器として機能する。

母性は、母親だけでなく父親にも開く。社会のためにも大事なことであり、父として育ててもらえる。

○周産期は、大きな変化の時であり、吊り橋のような状態。

吊り橋から落ちそうな人を見つけ出すことも必要であると同時に、吊り橋を渡っていく人にそっと同行することがとても大切なこと。

○親と子が出会い、関係性が生まれ育つ中で子どもの心は育まれ、親は子どもを育てるという大変な営みと喜びをもって担うことができる。

その時、周囲に包み支える人々がいることが大切。（母親自身が守られ、世話をされながら、赤ちゃんを抱っこし世話をすることの大切さを実感していく。）

○親は、子どもの日々の発達に新鮮な喜びをもっており、そのようななかで育つことにより子どもは、自己肯定感を育む。

○大切に思うこと

- ・ 子ども自身が、「生きる喜び」を体験すること。
- ・ 親が、子どもと同じ時間を生きるかけがえのなさを歓べること。
- ・ 周囲の人々によって、子どもと家族を支える柔らかくしっかりとしたネットが幾重にもできていること。

【講演をとおして明確になったことや課題（制度・人・地域・事業内容など）】

○現代の母親の育児能力が低下したのではなく、社会の育児を支える能力が低下した。

○地域は「群れ」として機能しているのか。

一世代前からの孤独な子育てや現代の密室の子育てが現状にある。「群れ」は崩壊してしまったのか。

群れに変わる子育て支援が必要である。

子どもが生まれ育つことを支え、親が親として生まれ育つことを支えるのは、私たちみんなの役目です。

○産みさえすれば母親になれるのではなく、また育児知識や技術を取得すればその子に相応しい子育てができるのでもない。

母親は、赤ちゃんに育てられ母親になる。赤ちゃんと言葉あう親が親になる。赤ちゃんの「育つ力」が母親の「育て

る力」を引き出し、母親の「育てる力」が赤ちゃんの「育つ力」を引き出すという相乗的相互作用が生じ、関係性が育っていく。

○子育てがうまくいかない時、親子の関係に周囲ができることとして

守られたなかで親子が向き合えるように、親子関係を楽しめるようなシチュエーションの工夫が大切である。ただし、関係性を操作することはしてはいけない。

○支援のあり方として、何かをしてあげる、何かを伝えるということよりも「共にいる」という思いで支えていくことが大切である。

【子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等】

○親子を「群れ」で守ることが大切なことから、子育て支援拠点事業として保育者が、ファシリテーターとなり、一人ひとりを輪の中に招き入れる心配りを大切にする。子育て中の親が安心・信頼できる場を作り、親同士の相互作用を引き出していく。



日本子ども子育て支援センター連絡協議会
(日本子ども子育てネット)

●事務局●

〒861-0123 熊本県熊本市北区植木町有泉829

TEL 096-272-0673(山東こども園)

TEL 096-272-0699(子育て支援センター) FAX 096-273-3322

メール info@kokonet.jp HP <http://kokonet.jp>